「モモンバのくくり罠」

作／横山拓也

【登場人物】

百原真澄（ももはら・ますみ）
百原椛（ももはら・もみじ）
小野田健治（おのだ・けんじ）
並木沙良（なみき・さら）
進藤駿介（しんどう・しゅんすけ）
百原修（ももはら・おさむ）

【設定】

2023年秋。
京都府と滋賀県の県境辺り（滋賀県西部の連峰）の東側山裾をイメージした架空の場所、帯武市（おぶし）にある帯武町（おぶちょう）。
標高500メートルほどの帯武山（おぶやま）の中腹に建つ百原家の民家。その軒先、庭先が舞台となる。
一帯は廃集落と化しており、近くに同じような民家もあるが、現在は人は住んでいない。また、百原家より先には民家はなく、登山道とは呼べない獣道のような道が山の上の方に続く。
インフラは不十分。百原家では、電気は家庭用太陽光発電で自給、ガスはプロパンガスを入れているが、あまり使わないように工夫して暮らしている。水道は湧水からパイプを繋いで引いたり、雨水を溜めたりしている。
車でのアクセスが主で、県道から山道に入り、徐々に細く、舗装が荒くなる道を30分程度行く。
山道の要所要所にバス停があり、帯武市が運営するミニバスが運行している。しかし、百原家からバス停まで徒歩20分かかり、かつ現在は予約制なので使い勝手は悪い。（10年前までは一般路線として運行されていた）
県道まで下りたら集落があり、学校や役場、スーパーマーケットもある。帯武駅（おぶえき）から町を循環するバスも走っている。
小野田の家や駿介の実家は、帯武市の町の中にある。
修が住んでいるアパートは、帯武駅から鈍行列車で40分くらいの都市部、和田橋駅前にある。

［プロローグ］

帯武山の獣道。
夜が明ける前の時間帯。
シンとした空気。
虫の音と鳥の声などがささやかに聞こえる。
動物が獣道を進む、葉擦れの音。
茂みから雄の鹿が顔を出した。
くくり罠が作動する音がして、鹿が甲高く鳴く声。
鹿の暴れる音と鳴き声。

［1］

百原家の軒先には、人が集えるように、テーブルと椅子が置いてある。母屋の隣に猟で捕獲した獣を解体する小屋がある。
下手側は車道（駐車スペース）へ、上手側は畑へ、奥は山（獣道）へ通じる。客席側は開けていて、雄大な景色。
11月16日、16時半頃。
進藤駿介がいる。スマホで山の景色の動画を撮る。
録画停止して、スマホをいじる（誰かに動画を送信しようとしている）。
車を停めていた小野田健治が遅れて現れる。
抱えている段ボールにお酒やツマミ、そのほか、日用品なども入っている。
駿介、顔を上げて、

駿介　あ、運転ありがとうございました。
小野田　おぅ。景色ええやろ？
駿介　はい。

と、言ってすぐにスマホに戻る。

小野田　もうちょっとしたらええ感じの夕焼け空なるわ。

と、段ボールをその辺に置く。

小野田　て、今ちゃんと見てた？　景色。
駿介　見てましたよ。
小野田　スマホ見てたんちゃうん。
駿介　電波悪くて。

小野田　スマホ見てたんやん。電波の棒んとこ。
駿介　電波の棒…1本立ったり立たなかったりなんですよ。
小野田　ほら。景色見てへんかったやん。
駿介　いや景色は見ましたって。
小野田　「見ました」言うてるし。過去形なってる。さっきは「見てました」言うてたのに。
駿介　「見てました」も過去形でしょ。
小野田　「見ました」と「見てました」はちゃうやろ。「コップ割れました」と「コップ割れてました」はちゃうやろ。
駿介　ちょっと待ってください。こんな雄大な景色を前にして、そんな重箱の隅つつくようなこと言います？
小野田　話そらしたらアカンて。
駿介　そらしてませんよ。雄大な景色の話、してるじゃないですか。
小野田　雄大な景色の話ちゃうやんか。俺が重箱の隅つつく話やんか。
駿介　自分で重箱の隅つついてる自覚あるんや。
小野田　スンスケくんが言うたんやろ。重箱の隅つつくって。

駿介、ちょっと笑って、

小野田　なんや。
駿介　いや、小野田さん、結構神経質ですよね。
小野田　神経質とかちゃうねん。そら神経質な部分もあるで？　罠仕掛けるときもそうやし、獲物解体するときは刃物かて使うねんから、神経質くらいやないと。
駿介　はあ。
小野田　けど、今はちゃうで。今はハッキリさせたいだけや。今、スンスケくんが景色見てたんか、スマホ見てたんか。
駿介　なんでそんなこと。（こだわるんですか？の意）
小野田　なんか調子良く合わされたみたいなん、嫌やんか。「景色ええやろ？」言うて、「はい」とか言うときながら、ホンマはスマホ見てたとか、なんか嫌やんか。
駿介　え、ヤバい人？　小野田さん。
小野田　ヤバい人ってなんや。
駿介　そんな仙人みたいな風貌で、その因縁の付け方、ヤバいですって。
小野田　因縁なんか付けてへん。
駿介　完全に因縁。
小野田　自分が適当な返事するからや。
駿介　だから…。じゃあ、全部言いますけど、今夜、はじめて小野田さんと膝突き合わせて一杯やるのに、こんな感じで全部言わなアカン人なんかと思ったら気い重いな、と思いながら全部言いますね？
小野田　なんやねん「全部言います」って。

その指摘はスルーして、

駿介　いや、俺、スマホでこの山からの風景の動画撮ってたんですよ。ほら、見て。

と、スマホで撮った景色を見せる（小野田に渡す）。

小野田　おぅ。な？　すごいやろ。
駿介　ええ。ね？　この時点で俺がちゃんと景色見てたことは証明されたってことでいいですよね？

小野田　景色なんか直(じか)に見たらええやん。スマホかざしてたら、それはもうスマホ見てることになるやんか。
駿介　スマホを通して見てたんですよ。

小野田、スマホを掲げて、景色を撮るような仕草をして、

小野田　だって、こうやろ？　こんなん、スマホ見てるやん。(駿介にスマホを返す)
駿介　今のは撮ってるフリでしょ？　そりゃスマホ見てることになりますよ。
小野田　な？
駿介　「な？」ちゃうし。そんなん、一休さんが縄結(ゆわ)えて「屏風の虎を出してください！」って言うてんのと一緒やん。

小野田、ついていけず、頭の中が「？」
駿介もすぐに撤回する。

駿介　一緒ちゃうわ。雰囲気で言うた。今のは忘れてください。
小野田　なんやねん。

駿介、仕切り直して、

駿介　いや俺、「紅葉めっちゃきれいやん」って思ったから、動画撮って、友達に送ろうとしたんですよ。そしたら、全然電波なくて、「あ、送られへん」ってなって。で、山の上で電波拾う方法、ネットで調べようとしたんですけど、「あ、電波ないし無理やん！」ってなってたところに、小野田さんが「景色ええやろ？」って聞いてきたんです。俺、ちゃんと景色見て感動してたし、だから「はい」って答えた、っていう流れです。
小野田　むちゃくちゃ喋るやん。
駿介　だから全部言うって言うたでしょ？　気い重いなって思いながら、全部言いました。
小野田　もうええもうええ。スンスケくん、ホンマに英治の息子か？　あいつもっとサッパリしとったで？
駿介　親父は親父、俺は俺です。あと、俺のこと、ずっと「スンスケ」って言ってますけど、駿介ですから。
小野田　は？　やからスンスケくんやろ？
駿介　駿介です。
小野田　スンスケ。
駿介　なんで？　なんで「しゅ」って言われへんの？
小野田　「しゅ」。言えるわ。「しゅ」。
駿介　駿介。(少しゆっくり)
小野田　しゅんすけ。(合わせてゆっくり)
駿介　駿介。
小野田　スンスケ。
駿介　スンスケになる。
小野田　なってへん！

そこに百原真澄が登場(終始左足を庇うような歩き方)。
仕留めた鹿を引きずってきた。
先に小野田が気づいて、

小野田　おぅ、お疲れさん。
真澄　ああ小野田さん。

駿介、すぐに鹿に気づいて、

駿介　おわ。
小野田　お！　いきなり掛かっとった？
真澄　うん。
小野田　（駿介に）今期最初に仕掛けた罠で〝もう〟やで？
駿介　すごい。
小野田　え、わかってる？
駿介　なんとなくわかります。銃も使わないで捕まえたってことですよね。
小野田　わかってへんな。真澄ちゃんは銃猟やなくて、罠猟専門や。
駿介　罠猟。
小野田　バネ式のワイヤーの罠で捕獲するやり方な。
駿介　へえ。それで捕まえて一人で引きずって来たんですか？
真澄　そらそうやんか。私の獲物や。
小野田　真澄ちゃん、足大丈夫か？
真澄　いちいち心配しんでええから。
小野田　言うてくれたら一緒に行ったのに。
真澄　大丈夫やって。
小野田　見回りは基本二人で行くもんやで。
真澄　はいはい。

と、適当に返事して、真澄が動き出すので、

小野田　手伝うわ。

と、鹿を一緒に持って解体小屋に運び、作業台の上に乗せる。
真澄、水場の蛇口にホースをつないで、鹿に水をかける。（作業の段取りは芝居の成り行きでストップしたり再開したりする）

小野田　止め刺し、問題なく？
真澄　だいぶ弱っとったしな。昨日の晩にはかかってたんかな。もっと早よ行ったらよかった。
小野田　それはタイミングやからしゃーないって。
駿介　止め刺しって？
小野田　ん？　言うたらトドメや。ナイフで頸動脈切る。
駿介　へえ。
小野田　前足にワイヤーはまってるけど、ある程度動き回るから難しいねんで。ハンマーとか棒で頭どついて気絶させて、ナイフで首元切る。あとは心臓をポンプがわりにして、血い抜けるだけ抜いてやる。その手際でだいぶ肉の味が変わってくんねん。
駿介　ほう…

と、一瞬残酷に感じた思いを飲み込むような相槌。

小野田　なに？　かわいそうとか思ってるん。
駿介　いや、かわいそうって言うか、ウチとやってること逆やから。どっちか言うたら繁殖させる方やし。
小野田　アホ。畑やってる俺らからしたら、子供作られたら困んねん。
駿介　ああ。
真澄　小野田さんとこも子供つくって奥さんに持ってかれて困ってるもんな。
小野田　そやねん、って古い話やめぇ！（ノリつっこみ）　20年以上前や！

と、二人、笑う。所在ない駿介。

小野田、思い出したように、

小野田　あ、これ（駿介を指す）、「しゅ」んすけくん。
駿介　綱渡りくらい慎重に言う。
小野田　市会議員の進藤英治って知らん？　俺の同級生で、その息子やねんけど。
真澄　動物園で働いてる言うてた。（子やんな？）
駿介　はい。

小野田、改めて駿介に真澄を紹介する。

小野田　で、この家の主人（あるじ）、百原真澄ちゃん。
駿介　ちゃん…（小さく呟く）
小野田　くくり罠の名人な。
駿介　はい、すみません。
真澄　何がすみませんやの。
駿介　いや、ひがし動物公園の進藤駿介です。よろしくお願いします。
小野田　何を緊張してんねん。
駿介　ね。（何を緊張してるんでしょうね、の意）
真澄　なんで動物園なん。お父さんの秘書とかやらへんの？
駿介　いや、それは絶対ないんで。
小野田　スンスケくんは向いてなさそうやもんな。
駿介　向いてるとか向いてないとかちゃいますから。て、俺の向き不向きを判断するほどまだ知らんでしょ。
小野田　うん。こんな理屈っぽい子やねんけど、今日ちょっと付きおうてもろてええかな？
真澄　ああ、なんか言うてたな。
小野田　お酒も買うてきたし、話聞いたって。
真澄　うちで？
小野田　おぅ。あかん？

真澄、時間を気にするようにして、

真澄　まあ大丈夫ちゃう。
小野田　あ、頼まれてた日用品とかも買うてきたで。
真澄　ああ、助かるわ。
小野田　中入れとくわ。

と、段ボールなどを母屋の中へ。

真澄　そしたら、こっち、先処理してまうわ。

小野田、駿介に。

小野田　はじめてやろ？
駿介　あ、いや、
小野田　ああやってまずしっかり水で、泥とか汚れ流すとこからな。
駿介　ええ。
小野田　マダニとかもくっついてるから、しっかり洗う。
駿介　はい。
小野田　この後、腹割って、内臓出して、中もよく洗って、
駿介　実は、小学校の時、見てるんです。
小野田　え？
駿介　小野田さんとこのNPO主催の、お祭りのとき。

小野田　あ、新嘗祭(にいなめさい)？
駿介　それ。
小野田　真澄ちゃんに鹿の解体ショーやってもろうたやつや。
駿介　それです。
真澄　おったんや。
駿介　はい。
小野田　て、めっちゃ最近のような気いするけど。
真澄　言うて10年以上経ってんちゃう？　椛(もみじ)が小学校低学年やったし。
小野田　そんな前？　信じられへん。
真澄　そらウチらも歳も取るで。

小野田と真澄、笑い合う。

駿介　何がおもろいんすか。
小野田　(聞かずに)あんとき厄介なガキがおったんや。アホみたいに騒いでな。面白半分か知らんけど、真澄ちゃんがナイフ入れるのんに合わせて「殺されるぅぅぅ！」とかアフレコして。もう死んどるっちゅうねん。
真澄　あれはやりにくかったわ。
小野田　学校関係の人らが問題視してな、新嘗祭もあれっきりになってもうて。
駿介　あれっきり？
小野田　そうやで。あの一回で終わり。
駿介　ええ。
小野田　NPOのメンバーで時間かけて準備して、英治にもいろいろ予算のこととか取り計らってもろたイベントやったのに、ガキ一人のせいで。
駿介　……
小野田　なんか調子乗って、真澄ちゃんのこと妖怪とか言い出した奴もおって。なあ？
真澄　そうやんか。(そうだよ、それで随分迷惑したんだ、の意)百原の苗字モジって「モモンバ」言うて。
小野田　そうそう。モモンバ。
真澄　なんなん、モモンバって。
小野田　まあ、「モモンバ」っぽさあるけど。
真澄　やめぇ。どこがや。

小野田と真澄、笑い合う。

小野田　ああいう子供のための教育のつもりやってんけどな。

駿介、すっかり俯いてしまう。
その様子を見て、

小野田　なんや？
駿介　(意を決し)すみません！　それ、俺です。
小野田　は？
駿介　アホみたいに騒いだん、俺です。
小野田　はあ？
駿介　それがそんな問題になってたなんて、知らんかった…
小野田　スンスケ～(呆れのような、オモシロのような嘆き)
駿介　ホンマにすみません！
小野田　マジか、スンスケ。
駿介　あと、モモンバって言うたんも俺です。
小野田　おい、スンスケ～！

駿介　すみません！
小野田　ちょっと真澄ちゃん、どうする？
真澄　そしたら、この子（鹿）の後に解体するから捕まえといて。
駿介　ちょっ、
小野田　ほんなら止め刺ししとくわ。
真澄　苦しまんように一気にいったりや。
小野田　おっしゃ。
駿介　いやいやいや、
小野田　（十分に怖がらせてから）嘘じゃ！

小野田と真澄、笑い合う。

駿介　笑われへん！
小野田　冗談や。
駿介　もう…

駿介、強く反論は出来ず、反省もあり、消沈。

小野田　知っとったわ。
駿介　え？
小野田　あのあと英治が謝りに来たわ。一升瓶持って。
駿介　そうなんですか。え、なんですか、カマかけたんですか？
　ひどい。
小野田　何がひどいねん。ひどいんは自分やで？
駿介　それは、はい。
小野田　英治にも怒られたやろ？
駿介　はい。あんまり覚えてないですけど。
小野田　ＮＰＯの運営にもかなり影響あったからな。
駿介　いや。マジで。すみませんでした。
小野田　俺はもう抜けてるからええけど。
駿介　え。俺のせいですか？
小野田　なんでや。それはまた別の話。
駿介　ああ。
小野田　まあ、自分で白状して謝ったんは誉めといたろ。
真澄　ほんで、結局「モモンバ」ってなんやったんよ？
駿介　モモンバ。
真澄　あんたが付けてくれたニックネーム。
駿介　いや、全然覚えてないです。雰囲気で言うたんかも。
真澄　かなわんなぁ！　もうちょっとだけ文句言わせてもらうけど。あれで椛、学校で色々言われるようなって、かわいそうやってんで。
小野田　そうや。「モモンバの娘」言われて。
真澄　そうやんか。
駿介　娘さん…
小野田　椛ちゃん。
駿介　そうなんですね。
小野田　椛ちゃん、わからん？　同じ小学校やで？
駿介　覚えてない。
小野田　なんで覚えてへんねん。なんも覚えてへんやん。
駿介　普通小学校のときのことってそんな覚えてます？
小野田　（真澄に）椛ちゃん、今いくつやっけ？
真澄　ついこないだ19なったとこ。
小野田　もう19？　そうか、高校卒業したもんな。
真澄　今年の春な。
小野田　早いなぁ。
真澄　他人ん家（ひとんち）の子は早いねんて。

小野田　はぁ…(感心)。で、スンスケは？　て、いつのまにか呼び捨てなってた。まあええか。ええな？
駿介　はい。駿介ですけど。

その訂正は受け流して、

小野田　いくつ？
駿介　22です。
小野田　それやったらかぶってるやん。
駿介　まあでも、3学年離れてると…
小野田　知らん？　こっから歩いて往復しとった子やで？　一回地元の新聞にも出てたやん。
駿介　新聞読まない。
小野田　ちゃうやん。拾うとこ、新聞のとこちゃうやん。「ここから歩いて小学校通ってた」って方やん。
駿介　あ、こっから？　え、こっから？
小野田　すごない？
真澄　低学年のときは、パパが車で送ったり、そこ、下降りたとこから出てるミニバス乗ったりもしてたけどな。
小野田　やけど、バスも便数どんどん減ってしもて。4年生くらいからはほとんど歩いとったんやろ？
真澄　体もガッチリしてきてたからな。
小野田　帯武町のわんぱく相撲でしょっちゅう優勝してたやん。(駿介に)知らん？
駿介　知らないです。
小野田　下半身の強さは大人並みやったで。
駿介　だけど、どんだけかかるんですか、時間。
真澄　慣れてきたら1時間くらい言うてたけど。
駿介　それを往復でしょ？　ていうか、帰り。すごい登り。
真澄　まあ小さい頃から山で暮らしてたからな。鹿肉食べて育ってるから、筋肉の質が違うわ。
小野田　椛ちゃんはサラブレッドやもん。
真澄　モモンバの娘やからな。っておい！(ノリつっこみ)

小野田と真澄、笑い合う。

駿介　なんか二人、付き合うてるんかってくらい仲良いですね。
小野田　やめろ。
駿介　冗談ですよ？
真澄　ほんでなんなん今日は。
小野田　そう、スンスケのとこの動物園。(駿介に)自分で喋り。
駿介　あ、はい。
真澄　ひがし動物公園？
駿介　はい。
真澄　あれちゃうん？　ずっと休業してんちゃうん。
駿介　そうなんですよ。でも、休んでる間も、動物の世話はせなあかんやないですか？
真澄　そらそや。
駿介　屠体給餌(とたいきゅうじ)ってわかります？
真澄　うん。

真澄が随分あっさりと答えるので、

駿介　(意外)あ、わかります？
真澄　うん。
小野田　真澄ちゃん知ってた？

真澄　何を。
小野田　屠体給餌。
真澄　うん。
小野田　知らん顔やん。
真澄　うん。
小野田　どっちなん。
真澄　ええから早よ話進めて。
駿介　屠体給餌知ってる前提で話進めていいんですか？
真澄　うん。

フワッとした感じの「うん」に対して、

駿介　え、どっちなんですか。
真澄　どっちって何よ。
駿介　屠体給餌。「屠体」っていうのは、害獣駆除とかで処分される鹿とかイノシシで、その肉を「給餌」、つまり餌として与える。肉食動物の…うちやったらライオンとかの餌にすることなんですけど。
真澄　へえ。
小野田　知らんかったんやん。
真澄　ちゃうよ。
小野田　知らんねやったら知らん言うたらええやん。
真澄　なんか聞いたことあったような気がしてんもん。
小野田　気がしてんもんってなんやねん。傑作やな。

そしてまた笑い合う二人。

駿介　あの、本題入るまでに時間かかり過ぎるんですけど。
小野田　そうやってコミュニケーションするんやんか。
駿介　はあ。
小野田　もう後でにしいや。飲みながら話したらええやん。
駿介　まだ夕方。ていうかシラフでこれやのに、飲んだら絶対話できへん。
小野田　アホ。大事なんは飲みニケーションやで。なあ？（真澄に）
真澄　言うてもこっちもそんな時間ないねん。鹿、早よ捌いて内臓出さなあかんし。
小野田　ああ、肉傷む前にやらんと。
真澄　時間ばっかり経つわ。

と、駿介にジョークを含んだ視線。

駿介　いや、誰のせいですか。
真澄　私か？
小野田　俺もか？

と、笑い合う。

駿介　めっちゃ笑ってるけど。
小野田　ほんならスンスケ。解体、一緒にやらせてもらいいや。
駿介　ええ？
小野田　（真澄に）いや、屠体給餌に使う動物、自分で捕まえて、自分で解体してみたいねんて。自然のサイクルの一部になってみたいって。
真澄　そういう話かいな。パッと言うたらええのに。
駿介　パッと言おうとしたら、いつのまにか違う話になるんです。

小野田　一回経験させてもらい。
駿介　そんないきなり。
小野田　いきなりもなんも、まず第一歩踏み出さんと。なあ、真澄ちゃん。
真澄　やけど、こっちものんびりしてられへんねん。今日の夜、椛が帰ってくんねん。
小野田　あ、そうなん？
真澄　なんやかんやもう1年ぶりくらいなるわ。
小野田　おぅ。
真澄　なんとパパも一緒に。
駿介　パパ。（パパ呼びへの違和感）
小野田　ホンマに？　何しに？
真澄　知らんけど。
小野田　知らんってことないやん。
真澄　ついでにソーラーパネルの調子見てもらお思って。
小野田　なんや、そんなタイミングでスンスケなんか連れてきてもうてごめんやで。
駿介　なんか…
真澄　なんもごめんなことないねんけどな。
小野田　いや、そしたらえらい賑やかでええやんか。今夜は鹿肉でバーベキューや。
真澄　ちゃうやんか。椛、そういうのんが嫌で出て行ったんやから。
小野田　あ、そうか。
駿介　なんですか？　何が嫌で？
小野田　（聞かずに）うちの業務用の冷蔵庫で預かっといたろか？車乗せて、運んでもええけど。
真澄　いや、そんなん隠してどうするんよ。私は私で今まで通り生活してるとこちゃんと知っといてもらわんとあかんねんから。
小野田　そらそうや。
駿介　娘さん、出て行ったんですか？
真澄　出て行ったっていうか。
小野田　高校行き出してから、修さんのアパートと行ったり来たりやんな。
駿介　修さん…
真澄　うちの旦那や。
駿介　ああ。パパ。別居されてるんですか。
小野田　別居て。離れて暮らしてるだけや。
駿介　それを別居って言うんですけど。
小野田　（流して）椛ちゃん、今は修さんと一緒に住んでんねやろ？
真澄　そうよ。今年の年明けには完全にあっちのアパート移って。まあ、一回、町で生活してみたいって思ったんちゃう。
駿介　狩猟生活とか、自給自足の山暮らしなんて大変ですもんね。
小野田　椛ちゃんはその中で育ってきたんやで。
駿介　そうかもしれないですけど。
真澄　そら帯武山の家で暮らした方が身も心も健全やねんけどな。自然のもんだけ食べて生きてんねんから。
駿介　まあね。
真澄　元を正せば、あんたがモモンバとか言い出したから出て行ったようなもんやで？
駿介　ええ。（不満）
真澄　半分はホンマや。
小野田　まあ、思スン（春）期ってのもあったんちゃうかな。
駿介　思春期。

真澄　まあな。せやから、さっさと解体して、あの子ら来る前に新鮮なお肉いただかんと。
小野田　食べるんかい！
真澄　そら初物やで。きちんと「いただきます」せな。
小野田　そらそや。よし、俺らもご相伴にあずかろ。手伝うわ。
真澄　お願いしよか。
小野田　椛ちゃん何時なるん。
真澄　わからんけど。パパの仕事終わりで一緒に車で来る言うてたから、遅い思うわ。
小野田　それやったらいけるか。
駿介　どのくらいで解体できるもんなんですか？
真澄　まあ、4時間あればいけるんちゃう。
駿介　ええ、結構かかる。
小野田　早い方や。ほんで自分も手伝うねんで。

と、解体小屋の方へ促す。

駿介　ホンマに？
小野田　椛ちゃんなんか5歳くらいからナイフ持って手伝っとってんで。
駿介　それはさすがに嘘。
小野田　嘘ちゃうわ。なあ？（真澄に）
真澄　まあな。
駿介　そんなの虐待じゃないですかぁ。
小野田　何を言うてんねん。ほら、近くで見せてもらい。
駿介　ひええぇ。

3人は解体小屋の中へ。

いつの間にか夕暮れ。
鹿の解体がはじまる。（小屋から声のみが聞こえてくる）

真澄　そしたら、まず、タンを取り出すで。
駿介　タン。
小野田　美味いで、鹿のタンも。
駿介　食べるんですか？
小野田　当たり前や。
真澄　ほら、しっかり口ンとこ押さえて。
駿介　うああ。
真澄　ギュッと握る。
駿介　わぁ！　めっちゃマダニいる！
真澄　うるさいな。次、下顎にナイフ入れて、そのまま喉を裂いていくで。
駿介　ああああ。
真澄　管が2本あるやろ。食道と気道な。
駿介　うえええぇ。
真澄　胃の内容物が漏れんように、結束バンドで縛る。

時間経過。
20時頃。解体小屋に明かりが灯っている。
小屋からは3人の声。

真澄　ここ、みぞおちのとこから、胸骨と肋骨の間にナイフ入れて。
駿介　わああ。
真澄　いい加減に慣れぇな。もっとグッとやらんと。
駿介　はい！（情けない声）

真澄　はい、血ぃ出てくるで！　バケツ置いて。
駿介　わわわ。
小野田　止め刺しでちゃんと動脈切れてるから溜まった血が出てくんねん。
真澄　そしたら次は腹割るで。今度は下腹部にナイフ入れて、みぞおちまで裂く。内臓傷つけたらあかんで。うんこまみれやで。
駿介　無理ぃぃぃ。
小野田　しっかりせえ。
駿介　ひぃぃぃぃ。うわぁぁぁ。
真澄　はい、大きいタライ敷いて。内臓引っ張って。
駿介　うーわ、でっか。キっモ！！　おえぇぇ。
真澄　いちいちうるさい。

時間経過。
23時頃。
解体小屋は消灯。
母屋の明かりが灯っていて、中では宴会。
小野田の騒がしい声。

小野田　熱い熱い熱い！　早よ持てやスンスケ、落とすな、もったいない。
駿介　だって。
真澄　なにやってんねんな。
駿介　なんかすごいニオイ、これ。

と、咳き込んで、

小野田　アホ、むっちゃ美味いっちゅうねん。
駿介　めっちゃ煙が。
真澄　うるさいわホンマ。

笑い合う声。
溶暗。

[2]

和田橋にある百原修の自宅アパートから、自家用車で百原家に向かっている。
11月16日深夜。24時を回って17日になっている。
山道に入ってしばらく。
運転席に修、助手席に百原椛がいる。
山道に入ってから気分が悪そうな修。

椛　大丈夫なん？
修　……
椛　自分で運転しながら車酔いってするもん？
修　……
椛　一旦休憩する？
修　いや、大丈夫。

しばらく運転。

椛　山道、こんなに走ったっけ？
修　わからん。ナビが全然ナビせえへん。
椛　は、どゆこと？
修　現在地、全然拾わへん。
椛　迷ったん？
修　いや、わからん。
椛　わからん？
修　迷ったかどうか、わからん。
椛　それは迷ってるやん。
修　いや、まだわからん。
椛　今走ってる道が合ってるか間違ってるかわからんってことは、迷ったってことやん。
修　……
椛　自分の家行くのになんで迷うんよ。

しばらく走る。

修　最初に山に入った瞬間から間違ってたんかも。
椛　そやんな？　こんなとこからも行けるんやって思ったもん。
修　そんとき言うてくれたらええのに。
椛　だって、なんか抜け道みたいなんがあるんかと思ってんもん。（と、スマホに目線）

突然修が叫ぶ。

修　びゃああ！
椛　きゃぁぁ！　なにぃ！？

修、落ち着いてから、

修　なんでもない。
椛　なんでもないは無理やから。
修　いや、たぶん、タヌキかなんか。急に出てきて。
椛　もう、そんなことで。山住んでたんちゃうん。
修　住んでたって言うか。
椛　住んでたとは言わんか。
修　……
椛　帯武山の家行くの、何年ぶりなん。

修　何年って、そんな何年ってことは…あるか。
椛　あるよ。
修　……
椛　太陽光発電の、なんかの部品の交換のときは？
修　あれは、工事業者の人に行ってもらったから。
椛　じゃあ、私の高校入学式？
修　かな。
椛　やとしたら帯武山の家には来てへんやん。学校で待ち合わせした。
修　そうやったか。
椛　中学の時？
修　もう覚えてへん。

少し無言の時間。

椛　わかるとこまで引き返した方がええんちゃう？
修　？
椛　道の話やで。
修　ああ。言うても、Uターンする場所がない。ていうか、Uターンすんの危ないわ。暗いし。
椛　もう。これ何時に着くんよ。この辺ずっと圏外やし。
修　そのうちわかるとこに出るはずやから。道は繋がってんねんから。大丈夫や。…大丈夫やけど。
椛　けど何よ。

修、お腹を摩る。

椛　もう。落ちたりせんといてや。
修　そんなん言うなや。余計緊張するやんか。
椛　緊張してるん？
修　緊張っていうか。
椛　別れようとか思ってるん？

修、えずく。

椛　やめてや、気持ち悪い。
修　ごめん。
椛　もうどうせお母さん寝てる時間やし。どっかで休憩したら？
修　停めるとこないやろ。道狭すぎる。
椛　なんなんよもう。

ドライブは続く。

[3]

百原家の軒先。
1場の翌日（11月17日）。夜明け前、午前5時半頃。
気温は約10度で、寒い。
母屋から駿介が出てくる。

駿介　寒ぅ。
手を擦ったりして、息をハァと吐きかける。
水場で顔を洗うおうとして、水を触ると、

駿介　冷たっ。
と、ちょいちょいと濡らす程度。
家の裏辺りから、「ブホブホ」とイノシシの鳴き声がする。

駿介　え、何？
と、怯えて、身構える。
ややあって、母屋から真澄が出てくる。

駿介　びっくりした！
真澄　びっくりした！　大きい声出して。
駿介　すみません。
真澄　なんなん。
駿介　なんか、鳴き声がしてて。
真澄　イノシシちゃうか。
駿介　こんな家の近くまで？

真澄　こっちがイノシシの近くに住んでんねんやんか。
駿介　やっつけないんですか？
真澄　なんやの、やっつけるって。
駿介　だって。
真澄　私は自分が仕掛けた罠で、自分が食べる分だけ獲んの。
駿介　はい。

真澄、駿介の「はい」の意味がわからなくて小首をかしげる。

真澄　にしても、えらい早起きやん。
駿介　いや、小野田さんのイビキがすごくて。
真澄　ああ。
駿介　あと、布団が薄くて、腰とかバッキバキ。
真澄　悪かったな。
駿介　いや、別に真澄さんに文句言ってるんじゃなくて、布団の薄さのこと言ってるだけです。
真澄　布団で寝れただけありがたい思て。（ありがたいと思いなさい、の意）
駿介　ええ。

駿介、肩なんかを回しながら、

駿介　いや、これ布団のせいじゃないかも。なんかすごい全身筋肉痛なってる。昨日の解体作業のせいか。
真澄　解体もなかなか体力使うからな。大変やったやろ？
駿介　そりゃもう大変なんてもんじゃないですよ。普段動物の近くで過ごしてるのもあるし、精神的にやられたっていうか。
真澄　なんでも経験や。

駿介　ええ。
真澄　おかげで新鮮なジビエ料理にもありつけたやん。

駿介、その感想に触れないように、

駿介　いや、それにしても飲み過ぎですよ。
真澄　初物やったからな。鹿のタンとか心臓なんか食べたことなかったやろ？
駿介　ええ。
真澄　美味かったやろ。
駿介　まあ。ですね。
真澄　なんか引っかかる言い方するな。
駿介　正直、そりゃ牛の方が美味しいですよ。
真澄　ホンマ…。二度と食わしたらんからな。
駿介　はは。
真澄　いや冗談ちゃうで？
駿介　ニオイがなかなか独特ですよね、やっぱり。
真澄　そんなん思い込みやって。あんな新鮮なん食べられへんで？　タタキとか生でいってもよかったくらいや。
駿介　生はヤバいですって。
真澄　コンビニ弁当みたいなんばっかり食べて、味覚おかしなってんちゃう？
駿介　いやいや、最近のコンビニ知らんでしょ？　すごいんですよ？
真澄　保存料とか添加物だらけやんか。
駿介　そんなの気にしてたら生きていけませんて。
真澄　せやからここで生きてんねん。
駿介　まあ、そうなんでしょうけど。
真澄　そうやんか。

一寸ブレイクの時間。

駿介　結局、娘さんたちどうしたんですかね。
真澄　ああ。
駿介　ここ、電波弱いですけど、どうやって連絡取ってるんですか。
真澄　別に繋がらへんわけちゃうから。
駿介　俺のは全然ダメです。

駿介が反射的に暴れるようにして、

駿介　ひいい！
真澄　何。
駿介　虫！
真澄　そら虫もおるがな。
駿介　耳元でブーンって。

そして、山の方から動物の鳴き声。その声に怖がる駿介。

駿介　もう、いちいちびっくりさすぅ。
真澄　自分動物園の飼育員やろ？　ライオン担当してるんやろ？
駿介　そうですけど。まだ見習いやし。やっぱり野生ってのは。
真澄　檻に入ってへんかったら怖いん？
駿介　うーん。（認めたくなくて）
真澄　あかんなぁ。ようそんなんで飼育員なろう思ったな。
駿介　ね。

真澄　「ね」ちゃうわ。
駿介　なんか真澄さんと小野田さんって似てますよね。
真澄　はあ？
駿介　若者の追い込み方とか。昨日も二人から散々口撃されて。全然酒がうまくない。
真澄　アホ。あんたが情けないだけや。
駿介　これがモモンバの逆襲か！って。
真澄　言うやんか。
駿介　こういうことは言っても怒られないことがわかったんで。ささやかなストレス発散です。
真澄　その正直になんでも言うところ、憎らしわ。
駿介　はい。気づいたら胸ぐらつかまれてることとかよくあります。
真澄　それがライオンやったら首噛まれてんねんで。
駿介　はは。ライオンには言葉伝わりませんから。
真澄　…まともにやりおうてたら腹立ってくんな。
駿介　でも、ライオンの声が聞こえるときあるんです。
真澄　お。なになに。
駿介　はじめて屠体給餌やったとき。
真澄　昨日言うてたやつ。
駿介　普段は、鶏肉を決められた量だけ与えて、だいたい10分程度で食べ終わっちゃうんですよ。それが、鹿の足を与えたら、皮をちぎったりしながら、2時間くらいかけて夢中で食べてました。あのときは「美味い」とか「楽しい」って声が聞こえてきたんですよね。自然に帰ったような顔してましたよ。
真澄　ふーん。
駿介　でもね、屠体給餌って、餌になる動物に菌がいたらダメなんで、その消毒とかでめっちゃ費用が嵩むんですよね。
真澄　「何が自然やねん」って言いたなるわ。そもそも檻に閉じ込めて見せもんにしてる時点で。
駿介　ええ。だけど、色々課題はあるにせよ、害獣をそうやってライオンの餌にできるなら、ウィンウィンだと思いません？
真澄　私は害獣っておらんと思うねんけどな。
駿介　真澄さんが獲ってる鹿とかイノシシが正にそうじゃないですか。
真澄　あれは鹿であって、イノシシやんか。
駿介　でも、畑荒らしたりして、害になってる。
真澄　それを「害」っていう言葉使うて表現するなら「獣害」や。獣（けもの）による害。獣害っていう事実があるだけで、あの子らを「害獣」っていうのんは人間のエゴや。
駿介　おお。なるほどね。
真澄　「なるほどね」。
駿介　なんですか？
真澄　適当な相槌して。
駿介　そんなことないですよ。
真澄　まあまあエエこと言うたで？　なるほどみたいな楽な言葉使われたら、こっちが納得できへんやろ。
駿介　ああ。なるほど。
真澄　わざと言うてるやろ。
駿介　いやいや。
真澄　ええから、もうちょっと寝とき。あとで山ついてくるんやろ？　体力いんで。（必要やで、の意）
駿介　そうですけど、娘さんと旦那さん。来るかもしれないのに。
真澄　ああ。まあ勝手に家の中入って待っとくんちゃう。
駿介　旦那さん和田橋の方に住んでるんでしたっけ？

真澄　なんで知ってるん。
駿介　いや、真澄さん。昨日飲みながらいろいろ喋ってくれたじゃないですか。
真澄　はあ？
駿介　覚えてないんですか？　旦那さん、結婚当初から会社の近くに住んで、週末だけここに来る通い婚みたいな感じだったって。ソーラーパネルのお仕事でしたっけ？
真澄　そんなことまで喋った？
駿介　はい。娘さんが10歳の頃には、金銭的なサポートなしでやっていける目処もついて、だんだん旦那さんも家に寄り付かんようになったって。
真澄　めっちゃ喋ってるやん私。
駿介　まあ半分くらいは小野田さんが言ってたかも。
真澄　小野田さん他になんか言ってた？
駿介　他？　たとえば？
真澄　たとえばとかないけど。
駿介　昔は娘さんとよく相撲とったとか、キノコ狩りしたとか、そんなことは言ってたけど。
真澄　うん。
駿介　いや、だけど、今じゃ娘さんまで出て行って。俺がきっかけになってたなんて、本当、責任感じてます。
真澄　嘘ばっかし。責任なんか感じてへんやん。
駿介　いやいやいや。
真澄　まあ、あっちはあっちで二人で楽しくやってるんちゃう？
駿介　真澄さんは寂しくないんですか。
真澄　なんで私が寂しいんよ。
駿介　そっか。小野田さんもいるし、こっちはこっちで楽しくやってるってことか。
真澄　小野田さん関係ないやんか。私は私がやりたいように暮らしてるだけや。
駿介　でも、家族はバラバラなんですね。
真澄　みんな大人やし、それぞれの価値観があるからな。
駿介　家族なのに。
真澄　なんやの、家族家族って。
駿介　あ、でもよく考えたら、うちもありました。
真澄　何が。
駿介　子供のとき。俺が犬飼いたいってずっと言ってたのに、親父が動物ダメで。
真澄　価値観の違いやん。
駿介　俺、友達少なかったんすよ。
真澄　何突然。
駿介　俺、小さい頃から頭が切れる方だったから。
真澄　多分頭が切れてたんやなくて、ただ理屈っぽかったんやと思うで。
駿介　ちゃちゃ入れないで最後まで聞いてください。それで、小学生のときは毎年うさぎ小屋の飼育係になったりとか、高校の時も、保護犬ボランティアとかしたり、動物が友達みたいなとこあって。その流れで今の職場にもつながってて。親父からしたら信じられないみたいですけど。
真澄　へえ。
駿介　基本、俺は動物愛護の精神に溢れてるんすよ。
真澄　それで新嘗祭の鹿解体ショーも妨害したんやな。
駿介　妨害って。それは古い話だからアレですけど、価値観はそれぞれってことです。
真澄　家族もそれぞれでええっちゅうことやん。
駿介　ええ。まあ、普通に考えたら、ここで暮らすのは無理です

よね。若い人は特に。
真澄　そうか？
駿介　そりゃだって、文化的な生活が送れない。スマホが役に立たない時点で。
真澄　そういうのに縛られへん生活を送ってんねん。
駿介　真澄さんはそれでいいでしょうけど。
真澄　なんなん。なんで朝っぱらから説教みたいなことされなあかんの。
駿介　昨日の夜の仕返しです。

真澄、拳を振り上げる仕草。駿介はそれを避ける仕草。

真澄　ホンマに。
駿介　だけど、心配ですね。旦那さんと、娘さん。
真澄　大丈夫やって。

真澄、取り合うのが面倒になり、野菜を入れるカゴを小屋から出して、

真澄　私ちょっと畑に野菜採りに行ってくるから。
駿介　おお。こんな暗いうちから行くんですか、畑。
真澄　日の出前くらいがちょうどええねん。適当に野菜採ってきて朝ごはん作ったるわ。寝て待っとき。
駿介　ああ…。

その歓迎されていない返答に対して、

真澄　なにその反応。
駿介　俺、普段あんまり朝食べないんですよね。

と、お腹を摩る。

真澄　あんたはホンマ…
駿介　ええ、本当は朝食べた方が健康にいいってわかってるんですけどね。うん、だから、今日は食べてみよっかな。
真澄　ええよ、無理せんで。
駿介　いえ、いただきます。がんばれ、俺の胃腸ぉ。
真澄　ええってホンマに。
駿介　ほら、またそうやって若者のやる気を削ぐようなこと言う。
真澄　中年の気遣いを反故にするようなこと言うからやろ。
駿介　また言い返す。そこは素直に「ごめん」で済むのに。
真澄　胸ぐらつかみたくなる人らの気持ちがようわかるわ。
駿介　すみません。

と、急に深く頭を下げる。

真澄　なんなん今更。
駿介　これ以上会話したら、嫌われることは経験上わかってるんで。謝っておきました。
真澄　まだ経験が足りんな。手遅れや。
駿介　え、どういう意味？
真澄　終わり終わり。とりあえず行ってくるわ。もし小野田さん起きたら畑行った言うといて。
駿介　はい。了解です。

と、真澄は畑へ向かった。
その後ろ姿に声をかける駿介。

駿介　真澄さん、足悪いんですか？
真澄　え？
駿介　左足。なんか、庇ってるみたい。
真澄　歳取ったらどこかしらガタくんねん。放っといて。
駿介　はい。

真澄は去った。
駿介が欠伸をひとつして、母屋に入ろうと扉を開けるも、小野田の豪快なイビキが聞こえてきたので、入るのをやめて椅子に座る。

［4］

山道の車幅のあるところで休憩していた修と椛。
まだ椛が寝ている間に、エンジンをかけて出発した修。
少し走ったところで、椛が目を覚ます。

椛　あれ。…まだ走ってる。
修　うん。
椛　何時？
修　5時半。
椛　え？　何時間かかってるんよ。ていうか私そんな寝てた？
修　ごめん。お父さんも眠（ねむ）たなって。車停めれるとこあったから休憩してた。
椛　大丈夫なん？　身体。
修　大丈夫。
椛　車酔いは？
修　大丈夫。
椛　で、道はわかったん？
修　……
椛　そこは大丈夫ちゃうんかい。
修　いや、一旦わかるとこまで戻ってるとこ。
椛　判断が遅い！
修　もうわかると思う。
椛　なんやったん？　無駄な深夜ドライブ。朝出発するんと一緒やったやん。
修　…うん。
椛　何を怖がってるんよ。
修　怖がってへんわ。ただ、正直、これだけ会ってへんと、どこから話したらええんか…

椛　そら最初からやんか。
修　どこまで話したらええんか…
椛　そら全部やんか。
修　全部って、どこまでや。
椛　全部は全部や。まずはお父さんの病気のこと。それから、会社辞めたこと。
修　会社辞めた話する前に、お店のこと、言うとかんと。
椛　ディッシュ？
修　うん。
椛　その話、もうしてんで。
修　え？　あ、そうなん？
椛　うん。
修　そうなん？　え、いつ？
椛　いつやろ。結構前。私が高校行くのにお父さんの家泊まったりするようになって、
修　高一のとき？
椛　最初、私もあの店、お父さんが経営してるって知らんかったし。それ知った後くらいちゃう。
修　……
椛　いや、沙良さんのことは言うてへんで。
修　ああ。
椛　安心してる。
修　そんなんちゃう。説明が難しいねん。
椛　情けないわ。
修　お母さん、店のことなんか言うてた？
椛　なんか言うてたかな。わからん。覚えてへん。
修　沙良ちゃんのことは言うてへんねやんな？
椛　だから言うてへんて。
修　やけど、店の話したら、誰が店立ってるんって話にならんかった？　聞かれへんかった？
椛　だから覚えてへんって。
修　そんなん不自然やん。
椛　何を怖がってるんよ。
修　何も怖がってへんて。ただ、物事には順序があるから。
椛　だから、今日、行くんやろ。順序立てて話したらええやんか。
修　うん。それが難しいねん。
椛　情けない…
修、またえずく。
椛　もう、汚いな。
修　緊張してるんかな。
椛　知らんし。
ドライブは続く。

[5]

朝6時半。

駿介が椅子に座って、スマホを触っている。

小野田が母屋から出てくる。

小野田　寒ぅ。

駿介　おはようございます。

小野田　おはようさん。寒いのぉ。

駿介　山の上だから余計。

小野田　何時？

駿介　（スマホを見て）6時半。

小野田　真澄ちゃんは。

駿介　あ、畑にちょっと行ってくるって。

小野田　そう。スンスケ、えらい早起きやん。

駿介　なんか目が覚めちゃったっていうか。あんまり寝られなくて。

小野田　なに。枕変わったら寝られへんタイプ？

駿介　まあそれもありますけど。（小野田へ恨み節の表情を投げてから）複合的な理由です。

小野田　俺はマイ寝袋で快適やったわ。

駿介　でしょうね。

小野田　布団寒なかった？　ぼちぼちストーブ入れんとあかんな。

駿介　自分ちみたいに言う。

小野田　帯武山全体が俺んちみたいなもんや。

と、笑う。

駿介　今日何時くらいに帰れますかね。

小野田　なんなん。なんかあるん？

駿介　なんかあるかって聞かれたら、そらなんかはありますけど。

小野田　なんやねんそれ。なんもないんやんか。

駿介　なんかあるって言ってるでしょ。

小野田　なんか「は」って言うたやんか。なんか「は」あるって。

駿介　だからそれは、あるってことですよ。

小野田　なにがあるん。

駿介　そこは、プライベートなことなんで。

小野田　今もプライベートみたいなもんやん。

駿介　これは仕事に繋がってる時間なんで。

小野田　そんなん言うたら、生活の全部が繋がってるやろ。

駿介　わあ、朝イチでもこの感じか、小野田さん。

小野田　あ？

駿介　いや、いいです。とにかく、今日のスケジュール、ざっくりでもわかったら助かるんですけど。

小野田　なんやねん、偉そうに。まあ、朝メシ食って、落ち着いたら、罠の見回り行って、なんかかかってたら、降ろしてきて、解体してって流れちゃう？

駿介　また解体？

小野田　そら、獲物かかってたらな。

駿介　なんもかかってなかったら？

小野田　そんときは、そんとき考えたらええんちゃう？

駿介　小野田さん、細かいのか大雑把なのか、わからへん。

小野田　椛ちゃん来るかも知らんし。

駿介　そしたらもう、家族水入らずでやってもらって。俺は、帰りますし。

小野田　そんなんお前、歩いて帰られへんやろ。

駿介　そりゃ。乗せてってくださいよ。
小野田　なんで。俺は椛ちゃんとも喋りたいし。
駿介　俺がいたらおかしいでしょ。
小野田　別におかしないって。
駿介　俺、本当は昨日の夜には帰れると思ってました。
小野田　んなもん、こっちは酒飲んでんねん。
駿介　泊まりなら泊まりって言ってくれたらいいのに。
小野田　そしたら何？　パジャマとか持ってきたん？

と、馬鹿にしたように笑う。

駿介　いや、パジャマはないけど。「せめて下着の替えくらいは」って思うでしょ。服もニオイすごいし。
小野田　そんなん気にすんなや。
駿介　ていうか、お風呂入りたい。
小野田　一日二日入らんでも死なんわ。
駿介　生き死にの話なんかしてません。お風呂ありますよね？　トイレの横のとこ。
小野田　一応な。
駿介　お風呂、後で借りれるかな。
小野田　どうせすぐ汚れんねんから無駄やて。山行くねんし。
駿介　うーん。
小野田　ガス、プロパン入れてんねん。他人が無闇にエネルギー消費したらあかんやろ。
駿介　別に無闇ってことはないでしょ。汗流すくらいですよ？
小野田　汗なんか流すな。もったいない。
駿介　なんで汗がもったいないんですか。
小野田　水がや。

車の音がして、小野田が音の方を見る。

小野田　あ、車。

駿介、小野田の視線を追う。

小野田　修さんや。
駿介　真澄さんの旦那さん。
小野田　あ、俺の車邪魔やったか。

修は、小野田の車より下方に停めて、もう降車している。
小野田、遠くから声を掛ける。

小野田　修さん！　ごめんやで！　えらい早い時間に着いたなぁ！

そして、椛を見て、その容貌がすっかり変わったことに驚き、小さくつぶやく。

小野田　え？　誰や？　椛ちゃん？
駿介　なんですか？
小野田　いや、嘘やろ？
駿介　なんなんですか。
小野田　めっちゃ痩せてる。
駿介　そうなんですか？
小野田　なんか、悪い病気やったら…（どうしよう）
駿介　え。
小野田　しっ！

駿介　なんも言うてへん。

近づいてくる椛を待つ。
椛、登場。

椛　あ、小野田さん。久しぶりや。
小野田　久しぶり。

椛、駿介を見て「？」

駿介　あ、おはようございます。
椛　おはようございます。
小野田　椛ちゃん。えらい、あれやな。
椛　何。
小野田　いや、なんか。スッ(シュッ)としたな、思って。
椛　ああ、ちょっと痩せたかも。
小野田　いや、めっちゃ痩せたんちゃう？
椛　どやろ。
小野田　大丈夫なんやんな？
椛　何が？

椛が取り合わないので、一旦痩せたことについては保留する。
修が現れる。
小野田たちがいることを訝しむようにしながら、

修　おはようございます。
小野田　おぅ、修さん。おはよう。
修　こんな早朝に。
小野田　そっちやん。昨日来る聞いとったのに。
修　ああ。
椛　お母さんは。
駿介　今、畑に。
修　えっと…？
小野田　英治の息子やねんけど、英治ってのは、市会議員の進藤英治ってやつで、もう5期？　ベテランでな。俺の幼馴染で…(面倒臭くなって駿介に)もう自分で言うて。
駿介　あ、すみません。ひがし動物公園の進藤駿介です。父のつながりで、小野田さんに真澄さんをご紹介いただいて、お邪魔してまして、
修　そう…真澄の夫です。

小野田、改めて修と椛を紹介する。

小野田　修さんな。で、椛ちゃん。あ、椛ちゃん、スンスケ同じ小学校やねんで。
椛　なんか、はい。
小野田　え、覚えてる？
椛　いや、覚えてへんけど。

本当は覚えていることが後にわかる。

椛　なんで朝から？
小野田　いや、昨日からやねん。打ち合わせもあって、そのまま泊めてもろて。
駿介　あれ打ち合わせだったんですか？
小野田　打ち合わせやろ。

駿介　ただの宴会。最初からお酒も飲んでたし。
小野田　やかましい。
修　まあ、一旦中に、

と、修が母屋の扉を開く、

修　うわ、すごい。

と、ニオイにむせるようになって、家に入るのを拒んで扉を閉めた。

小野田　え、何？　臭い？
修　なんか、すごいニオイ。
小野田　そんなにか？
駿介　ほら。
椛　焼肉したん。シカ？
小野田　お、わかる？

と、嬉しそうに言ってしまったのを引っ込めるように、わざわざ言い淀んで、

小野田　いや、うん、まあ。
椛　一昨日から解禁やもんな、猟。
小野田　そうやねん。真澄ちゃんの仕掛けた罠、初日から見事にオスの鹿かかってな。昨日、スンスケも一緒に解体させてもらって。
椛　一緒に。
小野田　そら、椛ちゃんみたいに上手には出来へんで？
椛　私は、
小野田　そやな。そんなん、今はもうな。もう、なんかお姉さんなって。なあ？
椛　別にそういうのんちゃうけど。

そこに、真澄が畑の野菜を持って戻る。

小野田　おぅ、真澄ちゃん。

真澄、まず椛の痩身に気づき、

真澄　ちょっと、なんや、椛、えらい痩せてもうて。
小野田　そやねん。
真澄　どないしたん？
椛　別に。
真澄　別にちゃうやんか。ちょっとパパ。
修　うん。
真澄　びっくりするやん。
椛　服のせいでそう見えるんちゃう？
小野田　ダイエットか？　そんなんしてもええことないで？
椛　ちゃうから。
真澄　あんた病気とかちゃうやろな。
椛　ちゃうって。
真澄　もう、パパがちゃんと気にしてやってぇな。
修　そんな言うほどか？
真澄　だって、ここに居った頃からしたら、ガリガリやんか。
椛　そんなことないって。
真澄　1年足らずでそんな…
小野田　なんかモデルさんみたいやで。

椛　もうええから、私の話は。
真澄　なんか食べるか？　…あんたが欲しそうなもんはないかもしらんけど。野菜、今採ってきたやつあるけど。鍋でも作ったろか。
椛　いいって。来て早々なんなん。
真澄　だって…
小野田　そら1年ぶりやねんから。色々構いたくなるんが親ってもんやんか。
椛　いいの。

とキッパリ拒否。
真澄、切り替えて修に、

真澄　ほんで、なんでまたこんな朝に。
修　ごめん。
真澄　え、何時に出たん。
修　ちょっと遅なったんは遅なってん。連絡しといたら良かったんやけど。
真澄　心配するやんか。
駿介　めっちゃ楽しそうに飲んでましたやん。

小野田が小突く。

駿介　イテ。
真澄　とりあえず、中。（入って）
小野田　ホンマや。外で立ち話もアレやしな。

と、真澄と小野田が母屋へ向かうも、

修　いや、

と、動かない修に、

椛　無理そうなん？
修　ちょっと休憩してから。
小野田　なんや？　車酔いか？
修　いや、

と、お腹を摩るようにしている。
真澄、荷物を母屋に入れてから戻って、

真澄　なに。
修　うん。まあ、ちょっと、手術してな。
真澄　ええ？　なんの手術。
修　そんな大層なやつちゃうで。
椛　言うてもガンやで。
真澄　ガン？
小野田　ええ？
修　（椛に）そんなあっさり言うなや。
椛　一応言うとかなあかんやん。
真澄　なんなん？　大丈夫なん？
修　ステージ1の胃癌やってん。リンパ節に転移もないやつ。
真澄　いつよ。
修　手術は、夏頃。
真澄　なんで言うてくれへんのよ。
修　いや、ホンマ、内視鏡でチャチャッとやる程度やったから。

真澄　それにしたってやん。
椛　チャチャッとは嘘やし。まあまあ大騒ぎしてたやん。
真澄　水くさい。
小野田　ストレスや。仕事忙しすぎるんちゃう、修さん。
修　いやぁ、
真澄　何？　椛が痩せたんも、関係あるん？
椛　ないわ。私ガンちゃうし。
真澄　そうやけど。
修　それでかわからんけど、ちょっと肉のニオイとかが今、なんかあかんねん。
小野田　悪阻(つわり)みたいな感じか。
修　わかりませんけど。
小野田　え、わからん？(わかるやろ、の意)
駿介　そらわからんでしょ。
修　ちょっと外の空気あたらせてもらってた方が。
真澄　ええけど。寒ない？
修　いや、ちょうどええよ。
小野田　あ、真澄ちゃん、ホンマは、ソーラーパネルの調子見てもらお思ってたんちゃうん？
真澄　ああ。まあ、ええわ。
修　調子悪いん？
真澄　パワコンのファンが、なんか変な音すんねん。
修　前に交換してからそんな経ってへんやろ。
真澄　どうやったかな。
修　後で見て、担当のもんに連絡しとくわ。
真澄　助かるわ。
修　おぅ。
真澄　ほんなら、まあ、座って。
と、着席を勧める。
修　ああ、
椛　いやお父さん、どうせやったらこの流れで会社辞めたことも言うたらええやん。
真澄　なんて？
修　「言うたらええやん」ってお前、もう言うてもうてるやん。
椛　あ。
修　「あ」ちゃうわ。
真澄　え、何よ。
椛　お父さん、太陽光発電の会社、辞めてん。
修　だから、
真澄　エルソル？
小野田　何、エルソルて。
真澄　パパの勤め先。エルソルホームテック。
小野田　ええ？
真澄　辞めたん？
修　うん。
小野田　その歳で会社辞めるか？
真澄　病気のことで？
修　それは、きっかけではあるんやけど。
小野田　そんなん余計会社しがみついとかんと。
真澄　辞めてどうするんよ。
修　ちょっと待って。話進むんが早すぎるわ。椛。(お前のせいで、の意)
椛　ごめん。
修　話す順序があるって言うたやんか。

椛　うん。お店のこと先話すんやったっけ。
小野田　なに、店って。
修　もう…（なんで言うねん、の意）
真澄　お店のことは聞いてるで。和田橋の駅の高架下のバーやろ？　居抜きで借りて。オーナーなんやろ？
修　そうやねんけど、
小野田　なんやそれ。オシャレなことして、修さん。
修　いや、
小野田　え、いつから？
椛　もう4年くらい前ちゃう。
小野田　えっ4年？　全然知らんかったわ。なんで言うてくれへんの。
修　いや、
真澄　私かて椛にチラッと聞いただけやん。行ったこともない。
小野田　なんで。
修　そんな大したアレちゃうんで。
小野田　店一本でやってくってことなん？　会社辞めて。そんな儲かってるん？
修　そういうんやないんです。
小野田　そしたら今度和田橋まで出るとき遊びにいくわ。
修　いや、
小野田　店の名前なに？
椛　ディッシュ。
修　ちょう。（ちょっと＝咎める意）
小野田　ディッス？
駿介　ディッ「シュ」。
小野田　シャレとんなぁ。フランス語？
椛　英語やん。
駿介　皿でしょ。
小野田　わかっとるわ。わざと言うたんや。
駿介　何のために。
小野田　いやでもマジで一回顔出すわ。
修　そんなわざわざ来てもらうようなとこちゃうんで。
小野田　なんでぇな。え、俺みたいなおっさんが行ったらあかんとこ？　そしたら、スンスケも一緒に行くやん。
駿介　なんで俺が。ていうか、真澄さんでしょ、行かなあかんの。
真澄　私がそんなとこ行くかいな。
小野田　修さん店立ってるん？
修　や、
小野田　そうや。ジビエセンターで作ってる鹿のジャーキー置いたってぇな。めっちゃ美味しいのに、全然売れてへんねんて。
修　ちょっと待ってください。
小野田　いやマジで。パッケージも結構オシャレやねんで？　鹿のイラストもかわいらしいし。なあ？（駿介に）
駿介　知らんし。
小野田　なんで知らんねん。修さん、マジで、
修　一回。一回ストップ。落ち着かせてください。

と、修が懇願するように言うので、

小野田　おぅ。ごめんごめん。
修　椛。頼むわ。
椛　ごめん。
修　お前は何がしたいねん。
真澄　いや、パパやんか。
修　え。

真澄　何しに来たん。
小野田　真澄ちゃん、そういう言い方せんでも。
真澄　何か用があるんちゃうの。
修　せやから。話を、いろいろ。
真澄　それやったらええやん。できてるやんか、話。
修　俺のペースがあんねん。こんな家族以外の人らの前でする話ちゃうし。
小野田　うん。ごめんやで、修さん。
真澄　パパのんびりしてるから。こうやって椛がリードしてくれてやっとスムーズに喋れるんやんか。

言い負かされたように口籠る修。
駿介、小野田に。

駿介　やっぱり俺ら、帰った方がええんちゃいます？
小野田　なんで。
駿介　なんで、って。そらそうでしょ。

そこに、並木沙良が現れる。（疲労している）
遠目にたくさん人がいることを認識した上で、気後れしつつもおずおずと近づいてくる。
その登場に、気づいた者から視線がいく。

修　え？　沙良ちゃん？

と、発した修に皆の視線が移る。

沙良　やっと着いた。

修　なんで？
沙良　すみません。追いかけて来ちゃいました。
修　追いかけてって。そんな、どうやって。
沙良　電車で。始発で。帯武（おぶ）まで来て。で、バスで帯武山口まで。
修　え？　そっからは？
沙良　歩いて登ってきましたよ。早朝から登山。
修　なんで。
沙良　だって、何回も電話したのに出てくれへんから。

修、本当は気づいていたが、

修　気づかんかった。
駿介　電波がね、山は。
沙良　クソ、服装間違えた。めっちゃ大変でしたよ。バス降りて、畑作業してる人に声かけて、ここまでの道、教えてもらって。
修　それにしても、
沙良　まあ私も兵庫の田舎の山育ちなんで。でも、こっちの方が断然僻地ですね。そら椛ちゃんも出ていくわ。
椛　うるさいです。
沙良　ごめんごめん。椛ちゃんにも電話してんけど。
椛　はい。
沙良　はいって何。
椛　気づいてた。出んかったけど。
沙良　なんでよ。
小野田　ちょっとごめん。えっと？

沙良、自分の存在を問われていることはわかっているが、修に託

す。しかし、修は何も言わない。

椛　なんで何も言わんの？

修　いや、

椛　お父さん？

修　うん。いや、順序が、

椛　なんなん、順序順序って。ずっとそればっかり。

沙良　（修に）どこまで話したんですか。

修　いや、別に、まだ、何も。

小野田　何をしどろもどろなってるん。

修　なってませんて。

小野田　なってるやんか。ちょう修さん。これヤバいやつ？

修　なんもヤバくないです。

小野田　真澄ちゃんが今一番困惑してんで。なあ？

真澄　なんで私に振るんよ。

小野田　修さん。

椛　もう、まどろっこしい。

修　椛？

椛、構わず、

椛　沙良さんって人です。苗字はわかりません。

沙良　並木やん。知っといてよ。

椛　お父さんのお店、ディッシュでママやってる人です。

小野田　ママ？

沙良　ママって言い方やめてぇや。マスターでええやんか。

椛　マスターは男の人のこと言うねん。調べたけど、女の人はミストレスとか言うらしいから。

沙良　それやったらそう言うてよ。

椛　そんなん結局「ミストレスって何？」ってなって、「ママ」のことってなるやん。

沙良　なんかスナックみたいに聞こえるやん。

駿介　なんか仲良いですね。

椛　仲良いとかちゃうんで。

真澄　椛も知り合いなん。

椛　知り合いっていうか、まあ、そう。なんか、お母さんには黙っとけって言われてたから。（と、修に視線）

修　いや、お前言い方。

小野田　修さん。

修　ちゃいますって。

椛　お母さんも自己紹介くらいしたら。

真澄　……

真澄が何も言わないので、仕方なくという感じで、

椛　母です。（と、沙良に）

沙良　並木沙良です。

と、会釈。

真澄　なんかわからんけど…

駿介が気づいて、

駿介　あ、ディッシュって、そちら（沙良）の、お名前…

小野田　ん？

駿介　英語で。皿。
小野田　あ、ディッス。
駿介　ディッ「シュ」。
小野田　え、そういうこと？　え、なに？　囲ってるってこと？
修　違(う)、
真澄　何を金持ちみたいなことしてんねんな。
修　ちゃうねん。
小野田　何がちゃうんか説明せな。
修　さっきからしようとしてるんですよ。やのに、全然俺が思ってる感じで喋らせてくれへん。
真澄　パパがボヤボヤしてるからやんか。

駿介が沙良と修を指し、

駿介　ママ(沙良)の、パパ(修)。
小野田　ややこしいから。(やめろ、の意)
沙良　(修に)ホンマにまだ全然喋ってなかったんや。
修　俺らもさっき着いたとこやねん。
沙良　え？　昨日11時くらいに出んかった？
修　いろいろあってやな、
沙良　にしても何時間かかってるんですか。
修　うん、
真澄　ほんで何なんよ。ちゃっちゃと言うてぇな。
修　そんなちゃっちゃと言うことちゃうねん。
真澄　こんな若い子まで巻き込んで。
椛　沙良さん童顔やけどそんな若ないから。
沙良　わざわざ言わんでええやろ。
駿介　なんか、若くない方がリアルですよね。
小野田　なんやねんリアルて。
修　あの。外野からごちゃごちゃ言うのやめてもらえません？
駿介　すみません。
小野田　何も言わん。何も言わんから。(続きをどうぞ)

修が口火を切るのを待つ時間。すぐに真澄が痺れを切らして、

真澄　罠の見回りも行かんとあかんし。時間ないねんで。
修　そうかもしらんけど。
真澄　だいたい、昨日の夜に来る言うてたのに。
修　それはごめん言うたやんか。
沙良　すみません。店でちょっと遅くまで話し合いっていうか、喋ってたんで。
真澄　知らんけど。
小野田　なんか不穏な空気やな。

と、発して、すぐに口をつぐむようにする。

椛　ていうか、なんで沙良さん来たん。来る意味ある？
沙良　だって、変な話になったら困るやんか。
修　変な話になんかならんて。俺の気持ちの話やから。
沙良　やけど、そこに私が関わってるってなったら、
修　待って。ごめん。ちょっと今は黙ってて。
真澄　何の話よ。全然わからへん。
修　一から話す。一から話すから。

修、周囲を見回して、

修　やっぱり席外してくれませんか？
小野田　いや、外す言うても。
修　家の中、入っといてもらうとか。
駿介　ここまで見せられて、もう無理ですって。
小野田　いやスンスケ一番関係ないからな？
駿介　もうこっちも巻き込まれてるんで。見逃し配信とかないでしょ。
小野田　ふざけてる場合ちゃうねん。
修　ホンマにお願いします。
真澄　ええやんか。聞いといてもらお。
修　は？
真澄　他の人おった方がええって。
修　なんで。
真澄　私がそうしてほしいから。

真澄、聞く体制になる。
修、受け入れなければならない雰囲気に覚悟を決めるも、頭を抱えるようにして、

修　どっから話したらええねん。
真澄　自分で一から話す言うたやん。
修　どこが一か、わからん。
真澄　とりあえず、その店持ったとこからでええやん。
駿介　ディッシュ。（沙良に視線を投げつつ、わざわざ確認しておく）

修、少し組み立てる時間を使ってから、

修　４年前の夏か。太陽光発電の関係で、不動産やってる人と仲良なって。和田橋の高架下に、ええ物件があるって教えてもろて。
真澄　ええ物件て。そんなん探してたん？
修　いや、
真澄　お店やりたいとか、そんなん興味あったん？
修　興味っていうか。たまたまやけど。
真澄　たまたまお店やろうってならんやろ。
修　…そうやけど。
椛　お父さんに話させてあげてぇや。
駿介　ことごとく会話の主導権を握られるタイプですね。
小野田　黙っとけて。

修がまた話の端緒を探す時間。

椛　（修に）これ、沙良さんのこと話さんと無理ちゃう？
修　いや…

沙良のプライベートに踏み込むことになるので、躊躇する。

沙良　じゃあ、私から言いましょか。
修　沙良ちゃん。
沙良　いいですよ。全然。
修　でも、
沙良　私、和田橋のチェーンの居酒屋で大学んときからずっとバイトしてたんです。修さんは、常連さんで、よう一人でも来てくれてて。そこで知り合ったんですけど。
小野田　和田橋の居酒屋言うたら、穴場亭か？

沙良　違います。
小野田　そしたら、あれや、えーと、牛若丸？
真澄　小野田さん黙って。
小野田　うん。
沙良　私、大学のときから、その居酒屋の店長とずっと不倫してたんです。十年くらい。それが、本社にバレて、店長が左遷されて。
駿介　一気にヘヴィーな話。
修　沙良ちゃん。
沙良　「あれ、私、どうするつもりやったんやろ」って我に返って。我に返るっていうか、見失って。人生見失って、どうしたらいいかわからんって感じになって。
駿介　それでコチラ(修)に乗り換えた。
沙良　ちゃうわ。

思ったより強い返しにおののいて、

駿介　おぉ…
小野田　黙っとけ言うてるやろ。
駿介　ヒトのこと…(言えないでしょ、の意)
沙良　そんときに、修さんがバー始めるから、店長やってくれへん？って声かけてくれたんです。最初は「なんで私？」って思ったけど、物件見せてもらったら、内装とかシャレてるし、大きさ的にも一人でやれそうやったし、お金の責任も取らんでいいって言うてくれて。
駿介　ええ。(お金の責任取らなくていい、への反応として)

真澄の視線も修に飛ぶ。

沙良　なんか、それまで居酒屋のバイトしかして来んかったから、三〇代の自分の生き方考えても、「これはええ方か」って思って。今となったらめっちゃ修さんに甘えてしまったこと、申し訳ないって思ってるんですけど。

修、強くかぶりを振って否定する。

真澄　パパ。この子のこと好きなんか。
修　アホ、なんでそうなんねん。
真澄　この子が落ち込んでたから、助けたろう思って店始めたんやろ？
修　そうや。それだけやんか。
小野田　それだけで、自分でリスク背負って店持つとはならんで普通。
駿介　しかも「ディッシュ」ですからね。
修　店の名前は、沙良ちゃんとも相談して、
沙良　待って。それは最初から修さんが決めてたやん。
修　いやいやいや、
沙良　そこはそうやん。私、そんな自分の名前を英語にして、みたいなダサいことせえへんし。
修　ダサい…
駿介　エラい言われよう。
修　ちゃうねん。そうやったかもしらんけど…
沙良　修さんが、「ディッシュにしたいって」。
修　いや、うん…
小野田　言い訳できへんやん。
真澄　パパ。それは「利用されてる」って言うねんで。

修　人聞きの悪いこと。
沙良　私も、利用してるつもりなんかないです。
小野田　やけど、客観的に見たらやな、
真澄　こんな大きい娘(椛)もおって、恥ずかしないん。
修　なんでそんな話になんねん。俺は、沙良ちゃんが店やったら絶対流行るって思っただけや。実際、儲け出てるし。
小野田　うん。まあ、そこは、会社辞める判断するくらいやしな。
沙良　私も会社辞めたんはビックリしました。
駿介　その相談はなかったんや。
修　俺は、ガンになって考えてん。自分の残りの人生のこと。
真澄　ガンは大したことない言うてたやん。
修　結果的には大したことなかったけど。考えるやろ、そら。この先の生き方。やっと自分の道を見つけたっていうか、
真澄　自分の道って。元々お店やりたかったわけちゃうのに。
修　でも、やってみて、「これや」って思ってん。
真澄　「これや」って思ったんは、この人(沙良)のことやん。
修　沙良ちゃんはビジネスパートナーや。
沙良　いや私は雇われてるだけで、
真澄　パパは自分がやりたいこと見つけたんやなくて、好きな人ができただけやん。全部それが動機でやってることやんか。

修、図星なのを隠し、聞こえのいいことを選んで口にする。

修　俺は、残りの人生を、ディッシュでやっていきたいんや。
真澄　沙良さんとやっていきたいってこと？
修　いや、
真澄　別れたいってことなん？　私と。

思わぬ提案に、一瞬虚を突かれる。

修　…その方がスッキリするんやったら、それでも。
真澄　スッキリするんはパパやろ。
沙良　だから待ってくださいって。そういう話になると思ったから来たんやんか。

沙良に視線。

沙良　修さん、勝手過ぎるって。私、修さんにはお世話になったとは思ってるけど、それ以外の部分では、「なんやねん」って思ってますからね？
修　え。
沙良　優しいふりして、自分勝手で、押し付けがましくて、そのくせ根性無し。
駿介　急に暴言。
沙良　従業員がオーナーの陰口言ってるだけやから。
駿介　陰って。完全に表に出てる。
沙良　従業員とオーナーの関係でしかないんです。ビジネスパートナーでもないし、この先一緒にやっていく相手じゃないんです。
修　わかってるって。そんなこと。それでええって言うてるやん。
沙良　だから…。タチ悪いなホンマ。なんで私の周り、こんな男ばっかり…(寄ってくんねん)
修　え？　待って。牛若丸の店長のこと言うてる？

小野田、牛若丸が当たっていたことに小さく反応。

修　それは違うやろ。あんなやつと一緒にせんといてくれよ。
沙良　昨日の夜、店で喋ってたときもそうやし、言い出したら、店に誘ってくれたあのときからずっとやん。「私のため」みたいな言い方して、私を縛り付けようとすんのやめてください。ご家族傷つけんのやめてください。
修　家族傷つけるってなに。俺はなにもそんな。
沙良　病気もしたんやから、もっと自分と、自分の周りの人のこと大事にしたらいいじゃないですか。
修　だからやんか。だから、自分の店と、その従業員を大事にして、
沙良　私じゃないでしょ（大事にするのは私じゃないでしょ、の意）。
修　椛かて。
沙良　椛ちゃんだってなんですか。
修　大事にしてる。
沙良　奥さんは。
修　それはだから、長いこと離れて暮らしてるから。やけど、ちゃんとこの家の面倒も見てるし、
真澄　見てもらってるつもりないけど。
修　公共料金とか、税金とかも俺が払ってる。
真澄　そんな微々たる（もんやんか）、
修　この家かて、俺が買って、そこに家族住まわせてる（っていうか）、住んでるんやし、それは大事にしてるってことやんか。
沙良　全然ちゃいますよ。それは責任を果たしてるだけ。責任の一部を果たしてるだけ。
修　それでええやんか。そうやってやってきたんやし。俺にも、俺の人生を生きる権利がある。
沙良　それはそれで生きてくれたらいいんですけど。私は関係ないですから。
修　そんな言い方せんでもええやんか。一緒に店やってんねんから。
沙良　私は一従業員です。
修　従業員、一人しかおらんねやん。それは、一であって、百やんか。
沙良　重いねんって、それが。
修　何が？　何が負担なん？　重たいもんは全部俺が持つやんか。これからは俺も一緒に店立つねんし。
沙良　そういうことちゃう。
修　俺の見つけた道、一緒に進んでほしいねん。
沙良　だから、
修　沙良ちゃん。
真澄　もうみっともないからやめえって。

真澄の声に、修の勢いは収まる。

真澄　ホンマみっともない。何を必死になってんねんな。
修　何がや。
真澄　見てられへんわ。娘の前でようやるな。情けない。
修　俺は、店の話をしてるだけやんか。
真澄　だけちゃうやろ。どう見たってこの子に目が眩んでるやんか。
修　しょうもないこと言うな。
小野田　ごめん修さん。それはもう、客観的に見ても、そうやわ。
修　違う。
駿介　見てて辛いです。

小野田　同じ中年として、胸痛なってくんねん。
修　ちょっと待ってください。みんなして何を言うてるん。わけわからん。意味がわからん。
沙良　そうやって理解できないフリすんのやめてくださいって。修さんがやってること、まあまあキツいんですって。
修　沙良ちゃん。
椛　もうやめて。

椛に視線が集まる。

椛　もうお父さん傷つけんのやめて。

椛、沙良を見据え、

椛　だから沙良さん来てほしくなかってん。絶対こうなるって思ってた。
沙良　傷つけてんのは修さんやで？　椛ちゃんのことも、奥さんのことも、私のことも。
椛　ちゃうやんか。沙良さんがお父さんの心の中まで引っ張り出すからやんか。沙良さんさえ来んかったら、お父さん、多分ここまで言うてへん。
沙良　考えてること喋ってもらわな、話できへんやんか。
椛　そしたら沙良さんもやで？　お父さんの淡い恋心利用してきたこと正直に言える？
修　そんなんないから。
真澄　情けないわ、ホンマに。
修　ちゃう言うてるやろ。
椛　お父さんの心に灯ったほのかな想いを上手に操ってること言われへんやん。
小野田　椛ちゃん。（もうやめたってくれ、の意）
沙良　そんなことしてへんで。
椛　してるに決まってるやんか。見てたらわかるわ。
沙良　私は、修さんの優しさに甘えてしまっただけやんか。それは反省してるよ。
椛　ホンマずるいわ沙良さん。沙良さんはそうやってシラ切れる人かもしらんけど、お父さん根が真面目やねん。おかげでこんな大火傷させられて。
沙良　何その決めつけ。ひどいわ。

沙良、ふと気づいて、

沙良　ていうか、なんで私、朝っぱらからこんなトップギア入れて喋ってるんよ。
駿介　しかも早朝登山直後に。
沙良　うるさいな。
駿介　えなんで俺にそんな厳しいんすか。

小さなブレイクがあり、真澄が修に問う。

真澄　なんよこれ。どうすんのな。

修は答えないが、椛が拾って、

椛　今日…ていうか、昨日のうちに来て、さっさと話し終わらせて、さっさと帰ったら良かってん。胃がんの手術のことと、会社辞めたことと、お店やってくことだけ伝えて帰ったら良かって

ん。やのに、お父さんがウジウジしてるから。
修　なんやウジウジって。
椛　そうやんか。ウジウジしてるから、沙良さんが来てもうたんやん。それで、プライドズタズタにされて。お母さんにも惨めな思いさせて。
真澄　なんも惨めちゃうわ。
椛　お母さん、まさかこんな目に遭うなんて思ってなかったやろ。
真澄　何が。
椛　昔、自分がおんなじようにされたから、余計に惨めやん。
真澄　何わけのわからんこと言うてんの。
椛　そうやんか。お父さんにこの家買い与えてもらって。自分がやりたかった自給自足の生活手に入れて。沙良さんとおんなじやん。
真澄　アホなこと。全然ちゃうよ。結婚してんねんで？
椛　本質は一緒やん。お母さんかって結局お父さん利用してここまでやってきたんやん。
小野田　ちょう待ち、椛ちゃん。そんな八つ当たりみたいなこと言うてどないするん。真澄ちゃんはここで立派に生活してんで。
椛　知ってる。小野田さんのこともしっかり利用してな。
小野田　椛ちゃん。
椛　小野田さんはお母さんのこと怪我させてるから、いくらでも助けに来るし、立派に生活してくれてたら、安心やもんね。
駿介　え怪我？　なんですか怪我って。
椛　ライフルで撃たれたんやん。
駿介　え？
真澄　誤解されるような言い方しんといて。
椛　実際そうやんか。それで、小野田さん、業務上過失致傷で有罪なったやん。
真澄　椛！
駿介　…有罪？
真澄　椛。
小野田　真澄ちゃん。それはホンマのことやから別に。
真澄　なんでそんな話今わざわざすんの。
椛　お母さんがみんなにも聞いといてもらおって言うたんやん。
真澄　そんな話までする必要ないやろ。
沙良　私以上に全方位的に攻撃してるで？
椛　攻撃なんかしてへんよ。事実を順番に言うてるだけ。
駿介　え、小野田さんにライフルで撃たれたってのは…
真澄　撃たれたとかちゃうから。そんなん、もうだいぶ前の話やんか。
駿介　（小野田に）服役してたんですか。
小野田　なんでや。執行猶予付くわ。あれ以来、銃も手放した。
真澄　私のせいやねん。錯誤捕獲で、熊が掛かってもうて。
駿介　熊。
真澄　銃でトドメ撃ってもらわな無理やって。小野田さん来てもろて。
修　ホンマやったらその時点で役場とかに連絡せなあかんかったんやんか。
真澄　それは、私の食い意地っていうか。食べてみたかってん。ホンマはあかんねんけど。
小野田　そこは俺も調子乗ってもうたんや。
駿介　それで、間違えて真澄さんを。
小野田　間違えるか。
真澄　小野田さんが銃で止め刺ししてくれるとき、跳弾（ちょう

だん)して。
駿介　ちょうだん。
真澄　弾が木かなんかに当たって、跳ね返って。
小野田　俺や。俺の腕が悪かった。
真澄　それをパパが騒ぎにしたからややこしいことなったんやん。
修　騒ぎて。それなりの事件やったやろ。
真澄　事件ちゃう。事故や。
修　そうやけど、
真澄　真っ先に110番したやん、パパ。
修　救急車は小野田さんが呼んでくれてたから。
真澄　なんでなんって思ったわ。
修　何にしても、警察呼ばんとおかしいやん。
小野田　そうやで。修さんが正しい。結局病院で医者が警察に通報するんやし。隠すとかちゃうから。
真澄　私は大丈夫やったのに。
修　大丈夫ちゃうかったよ。全治3ヶ月くらいかかったやんか。今も後遺症あるやろ。当たりどころが悪かったら死んでもおかしなかってんで。
真澄　狩猟やってたら、銃とか関係なく、そんな可能性いくらでもあるわ。
修　相手熊やぞ？　猟友会にも入ってる人が、遊びみたいに猟したらあかんやろ。
小野田　それはそうやねん。ホンマに反省してんねん。
真澄　そのせいで小野田さん、NPOの理事も猟友会も辞めなあかんようなって。あっこから小野田さんの人生変わってしもたんやんか。
小野田　事故起こしたんやから、それはしゃーないことや。
修　そうやんか。社会人として、何らかの責任は負わな。
真澄　誰が望んだんよ、そんなこと。
修　望んだとかちゃう。
椛　お父さんやん。
修　何をお前は。(言い出すんだ？　の意)
椛　お父さん、小野田さんがたびたびうちに顔出すのん嫌がってたもん。
修　変なこと言うな。
椛　私とお母さんと小野田さんがどんどん家族みたいなっていくの、見てられへんかったんちゃうん。
真澄　なんやの、この子はおかしなことばっかり言うて。
椛　お母さんはくくり罠の名人とか言われるようになるし、私も山暮らしにどんどん馴染んでいくし、お父さんだけ取り残されたみたいになって。なんか帯武山の家に来てるときも、お客さんみたいに扱われて、寂しそうやったもん。
修　そんなことない…
椛　なんで一緒にここで暮らそうとせんかったん？
修　そら仕事があるから。俺が仕事して金作らんと、こんな生活続けられるわけないやんか。
真澄　ちゃんとやっていけてます。
修　ちゃんとやっていけるようになるまでに、俺の援助が必要やったんは事実やろ。
真澄　援助て。そんなん家族やねんから当たり前やんか。
修　だからそう言うてんねん。俺は当たり前のことしてきた。
椛　そこに小野田さんがお母さんのこと面白がって、世話焼いてくるからややこしいことなって。
小野田　俺全然そんなつもりなかってんて。そら、真澄ちゃんはオモロいけど、世話焼くとか、そんなん。

真澄　そうやんか。ただの狩猟仲間やんか。
椛　ライフルの事故のせいで、余計拍車掛かってんやん。あの事故以来、後遺症もあるし、お母さん運転もせんようなって。小野田さん罪悪感で、何かと足になってくれたり、色々してくれるようなって。お母さんも散々甘えてきたやん。
小野田　それは俺が勝手にやってることや。
椛　わかってます。
小野田　それやったら…
沙良　ごめん。椛ちゃん。私が口挟むんアレやけど。なんでそんな話持ち出したん。関係なくない？
椛　あるよ。そういう小野田さんの善意が結果的にお父さんを除け者にして、お父さんも自分の生き方探さんとあかんようなったんやん。だからそういうの隠したまま、お父さんだけ傷つけんのは違うやん。
駿介　そうや。そういう話から始まったんやった。
修　（椛に）お父さん、お前が次々繰り出す過去の話のおかげで、ますます傷つけられてんで。
椛　ごめん。それは自覚ある。
修　俺が小野田さんに嫉妬して警察呼んだとか、そんなアホな話。（小野田に）ホンマに違いますからね。
小野田　わかってる。そんなわけあるかいな。
真澄　私も小野田さんのこと利用なんかしてへん。
小野田　それもわかってるって。そんなん1ミリも思ったことないわ。それに、真澄ちゃんの足は俺のせいやねんし。
真澄　それももう終わった話やから。

と、3人の間で溜飲を下げ合うようなやりとり。
椛、自分の発言で場を荒らしたことを自省するように、

椛　またやってもうた…

椛に視線。

椛　なあ。なんでそんな上手に蓋できるん。そういう風にできたら生きやすいん？

一同「？」

椛　大人っていっつもそうやん。なんで私は普通の大人になられへんの？
真澄　何言うてんのよ。あんたももう大人やんか。
椛　私は違う。
修　大人や。やのに、子供みたいに喚き散らして。
椛　大人って何？　どうやったらなれるん。
小野田　んなもん。大人なんか気づいたらなってるもんや。
椛　じゃあ、私がずっと鈍感なまま、ここで暮らしてたら、どんな大人になってたと思う？

椛の問いの真意が見えず、誰も声を出さない。

椛　この帯武山の家にずっと居（お）ったとして、フッて気づいたとき、私ってどんな大人になってる？
小野田　真澄ちゃんみたいになってるんちゃうか。
椛　お母さんみたいって、どんなん。
小野田　どんなんて、こんなんや。（と、真澄を指す）
真澄　やめてぇな。

椛　山でくくり罠仕掛けて、鹿とかイノシシ捕まえて、解体できる大人？　畑やって、自給自足できる大人？　水は湧水引いたり、雨水溜めたりして、電気とかガスはなるべく使わんように慎ましく生きる大人？
小野田　そうやんか。立派な大人や。
椛　それが立派な大人？
小野田　それ「も」立派な大人や。
椛　やけど、それ以外にはなれんかったんやん。
小野田　それ以外。
椛　お母さん以外。
真澄　やから山降りたんやろ。街で生活して、あんたも自分の道見つけようとしてるんちゃうの。
椛　それが全然あかんねん。
真澄　全然あかんって何。
椛　私だけなんか違う。
真澄　何も違わんやろ。
小野田　おぅ。街のお姉さんになってるやんか。
椛　私は、普通ちゃうねん。
沙良　全然普通やで、椛ちゃん。（駿介に）同世代の自分から見て、どうなん。
駿介　俺？　あ、はい、普通です。
沙良　アホ。そこは「カワイイ」とか言うとこやんか。
駿介　今そんなん求められてました？
椛　私、この人（駿介）がお母さんのこと「モモンバ」って言ったこと、覚えてます。
駿介　えマジ。
小野田　なんや、スンスケのこと覚えとった？
椛　小学生のときのお祭りで、お母さんが鹿の解体をみんなの前でやったときに、騒ぎ出した人。最初、なんか変な男子おるなって思ってたけど、周りの子らも一緒になって騒いだり、笑ったりしはじめて。
駿介　それは、ごめんなさい。若気の至りっていうか。ガキの浅はかさっていうか。昨日、真澄さんにも謝ったんやけど。
椛　私もまだ8歳とかで、何を言われてるんかわからんくて。
真澄　解体なんか日常やったからな。
椛　でも、同級生の子らにそんなん普通せえへんって言われて。ああ、私の家はおかしいんやって気づいた。お母さんが「モモンバ」になったあの日から。
真澄　そんなんなった覚えない。
椛　モモンバの家は、動物殺しの家。
小野田　と、当時誰かが言った言葉を口にしてみた。
駿介　誰やそんなん言うたやつ。
椛　俺は、そこまで言ってません。
真澄　お母さん、確かに動物殺してるからな。やけど、それは食べるためやしなって。
椛　そうやんか。私は自分らが食べる分しか捕らへん。
真澄　と、言ってから、もう少しだけ正直になって、そら、畑に入ってきてまうような子らを捕獲して、数を調整することもしてんで。やけど、それも人間が食べていくためや。
椛　私は別にそんなことどうでも良かってん。ただ、うちは他所ん家（よそんち）とは違う。みんながやってるようなゲーム機

もなかったし、テレビすらなかったし、
真澄　あんたは鹿とかイノシシの解体が楽しいって言うてたやんか。
椛　そう言うてたこともあったけど。
真澄　食べんのも大好きやったやんか。
椛　やけど、私かて普通にハンバーガーとか食べたかったよ。
真澄　なんで急にハンバーガーやの。
椛　めっちゃ覚えてる。なんか、やたらカサの大きい椎茸もいできて、鹿肉で作ったハンバーグ挟んで、特製バーガーや言うて。
真澄　あれか。椎茸ちゃう。カラカサタケや。
椛　どっちでもいい。
真澄　あんたが食べたい言うから工夫して作ったったんやんか。楽しいやんか。
椛　工夫なんかいらんかった。町で、普通に店で食べてみたかったんやんか。
真澄　あんなもん、おいしないやろ。肉かてキノコと一緒に食べた方が美味い。
沙良　そのハンバーガーめっちゃ食べてみたいけど。
駿介　確かに映えそう。
椛　そういうことちゃう…
沙良　そうやんな。
椛　塾とかも行かせてもらえんかったし。
真澄　そんなん、家遠いねんししゃーなかったやんか。高校行けたんやから別にええやん。
椛　もっと勉強したかったわ。教えてくれるのはナイフの使い方とか、ロープの結び方とかばっかり。
真澄　生活に必要なことやろ。それも大切なことやろ。
椛　すぐ電気消されるから、寝んのも早いし。
真澄　起きんのも早かったやんか。他の人と時間がちゃうだけで、朝勉強してて、偉かったやんか。
修　でも6時には家出んとあかんかったもんな。学校歩いて行ってたし。
椛　お父さんも同罪やで。私に何も与えてくれへんかった。
修　なんでや。和田橋の家に呼んだったやんか。ここにはない、文明を与えたったやんか。
駿介　文明。
椛　ホンマ、なんにも気づいてへん。
修　何がや。
椛　お父さんはずっとそう。帯武山の暮らしから逃げて、お母さんと一緒に生きていくのやめて、一人で普通の生活して。
修　なんでそんな風に言うねん。俺はずっと経済的に家族を支えてきたし、椛のことも世話したってるやんか。
椛　ちゃうねんて。（そんなことを望んでるんとちゃうねん、の意）
修　何がちゃうねん。
小野田　なあ椛ちゃん。それでも椛ちゃんは真澄ちゃんからたくさん与えてもらったやんか。この山で得たもんは、他の誰かが望んでも手に入らんもんやで。
椛　私はそんなこと望んでない。
沙良　私もわかるわ。うちの実家も田舎やから。高校卒業したらいち早く実家出たもん。
椛　言うても沙良さんの実家は普通でしょ。普通の田舎でしょ。スマホも普通に買ってもらってたでしょ。
沙良　まあ、うん。そうかも。
椛　うちは普通ちゃうもん。断然おかしいもん。

駿介　俺と同じ校区で、ここまで違う生活してると確かにな。
真澄　普通普通って言うけど、椛にとって何が「普通」なんよ。

椛、真澄を見る。

小野田　そやな。田舎で生まれるとか、都会で生まれるとかもそうやけど、うちみたいに離婚して母子家庭で育つ子もおるしな。
沙良　最初に与えられた環境に不満があるんやったら、早く自立して出ていくしかないもんね。
真澄　椛もそうしたやんか。自分で外に出て行けたやんか。
椛　でも、全然うまくやっていかれへん。
真澄　最初は誰でもそうやんか。私も。昔喋ったことあるかもしらんけど、私も、子どものときにいじめられてて、中学なってから学校行かれへんなって。やけど、うちはお父さんが登山とか、川遊びとか連れ出してくれてな、おかげで今があるんやけど。
駿介　おお、人に歴史ありですね。
真澄　私が椛に何を与えられたんかはわからんけど、別に普通やなくてもええやんか。まだ19やろ。私も、働き出してからやっと人と関われるようになったんやん。ほんでここに来て、アホみたいな話もできるようになった。

と、小野田を意識。

真澄　あんたもそのうち気の合う人らと出会えるって。
椛　ちゃうねん。そら誰でも色々あることはわかんねん。お母さんの子どものときの話も、大変やったかもしらんけど。やけど、お母さんは自分で選択してこの生活を選べてるやん。
真澄　だからあんたも選択したやんか。これからもいろんな選択して生きていくんやんか。
椛　ちゃうよ。なんでわかってくれへんの。普通がわからへんって言ってんの。
真澄　今はわからへんでもしゃーないやん。これからわかっていくようになるんやから。
椛　私は、普通がわからへんねん。わかったとしても、それのやり方がわからへん。自転車が何かはわかるけど乗り方がわからへんみたいな感じ。
真澄　なんでえな。
椛　みんなが思ってる以上に、私は子どものときに「普通」を与えてもらってないねん。こっそり手に入れることもできへん環境やってん。だから今、どこにいっても上手くいかへん。ファミレスでバイトしても、コンビニでバイトしても、全然あかん。
沙良　全然あかんって何？　人間関係？　仕事の内容？
椛　全部。
沙良　そんなことある？
椛　私が喋ったら、いっつも誰かが傷ついてる。
修　お前、外でもあんな感じなんか？
椛　だからあんまり喋らんようにしてるけど…
沙良　それは生まれ育った環境とかやなくて、ただ椛ちゃんの性格っていうか、性質の問題ちゃうん。
駿介　そんなズバリなこと言わんでも。
沙良　ちゃうやん。だから、お母さん（真澄）が言うてくれた「これから」ってことやん。今は生きにくいこともあるかもしらんし、環境のせいにしたくなるのもわかるけど、諦めるようなこと言わんでもええやん。
駿介　うん。仕事も色々あるし。もしかしたら動物園とか合ってるかも。

修、得心を得たように(椛の苦悩を理解したかように)、

修　よし。椛。うちの店で働いてみるか？

小野田　ディッス。

修　お酒の店やから、まあ来年、二十歳になってからでも。沙良ちゃんからも色々学んで。

椛　嫌や。

沙良　なんでよ。

椛　沙良さんは、嫌や。

沙良　腹立つわ、なんか。

駿介　でもわかる気もする。

沙良　なんなんよあんたは。

駿介　すみません。

沙良　(修に)あの、修さん。言うときますけど、私はもう辞めるつもりですからね。

修　え、なんで、

沙良　さっきオーナーにあそこまで言って、そのまま続けるだけの根性は流石にありませんから。

駿介　全然ありそうやけど。

沙良　しばくでホンマ。

駿介　どういうマインド？(で言ってるんですか？)

修　いや、沙良ちゃんに辞められたら、店潰れてまうやんか。

沙良　だから、椛ちゃんと修さんでやったらいいじゃないですか。いいアイデアじゃないですか。

修　だって、ディッシュの名前、

駿介　あ、認めた。

沙良　変えたらいいでしょ。「もみじ」でいいやん。

椛　私やらへんから。やりたないから。

小野田　せやから焦らんと、仕事もゆっくり探してやな、

椛　私、「もみじ」って名前も嫌やねんで？

駿介　もう手当たり次第噛み付く。

修　なんでや。11月生まれのお前にぴったりの名前やんか。この山で紅葉(こうよう)に包まれて生まれてきたんやんか。

真澄　産んだんは病院やけどな。

修　そうやけど。

真澄　私はここに助産師呼んで産みたかったのに。

修　そんなん無理やったやんか。こんな不衛生な環境で。て、今そんな昔のこと持ち出さんでええやろ。

椛　「もみじ」って鹿肉のことやん。そんくらい知ってたんちゃうん。

駿介　ん？　またわからんこと言い出した。

小野田　イノシシを「ぼたん」、鳥肉を「かしわ」言うやろ。

駿介　ああ。ぼたん鍋。

小野田　鹿肉は「もみじ」や。江戸時代、肉食が禁止されとったときに出てきた隠語や。

駿介　ああ。

修　それこそ言いがかりもええとこやんか。そんな由来なわけないやろ。

椛　わかってるよ。そんなつもりで付けてくれたんちゃうことくらい。だけど、私、ずっと共食いしてきたみたいで、めっちゃ嫌やねん。

駿介　想像力豊かすぎません？

沙良　ホンマ、命名で迷惑かける人やな、修さん。

修　え？

駿介　ディッシュ。

真澄　どうしたいんよあんたは。
椛　どうしたい？
真澄　ずっと文句ばっかり言うて。好きで出ていったんやから、好きに生きていったらええやんか。
修　そんな突き放したようなこと。
真澄　今は18で成人や。私は自分で生きていけるだけの教育はしたつもりや。
椛　特殊やん。山で野生的に暮らす方法だけやんか、教えてくれたんは。
真澄　それは諦めてもらわんとしゃーないやん。
椛　なんでよ。
真澄　だって。ほら、寺の息子は小さい頃からお経上げてるし、商売人の家に生まれた子は店の手伝いするもんやろ。
小野田　俺も親の畑があったから、継いでるしな。
真澄　あんたはモモンバの娘や。親が選ばれへんのは、世界中どこでも同じやんか。生まれる国もそうやし、人種も、宗教とかもそうやんか。

椛、瞬時に返す言葉が出ない。
駿介が拾う。

駿介　宗教って言葉が出たから、思ったんですけど。

駿介に視線が集まる。

駿介　うちの親父。市議会の選挙のとき、特定の宗教団体がサポートしてくれるんですけど。つまり、うちは、その信徒ってことなんですけど。

小野田　そんなことわざわざ言わんでええねんって。
駿介　（構わず）俺も、小さいときはしょっちゅう親に道場とか連れていかれてたんです。子どもやから何もわかってなかったけど、同世代の友達もできたし、遊びみたいな感じで。で、だんだん、俺はここに来んのなんか変やなってわかってきて、中学なったくらいから寄り付かんようにしたんやけど、友達は、親が厳しいんもあって、ずっと行かされて。なんか、今は幹部みたいになってる奴もおって。
小野田　待て。真澄ちゃんはそういうのんとはちゃうやろ。
駿介　ただ、親のせいで逃げられへんことがあるのも事実で。それで子どもが犠牲になってる場合もある。
小野田　せやから、真澄ちゃんはなんも強要なんかしてへんやんか。英治かて、スンスケのこと強要してへんやんか。
駿介　はい。だから道場行かんようなっても怒られへんかったし、なんなら親父すら、選挙で利用してるだけなんちゃうんって思います。
小野田　おぅ。
駿介　ただね、親は自分で選んでやってることやけど、子どもははじめっから染められるっていうか。俺なんかは、全然教義とか教えられたわけやないんで良かったんですけど、そちらはね。
小野田　なんやねん。
駿介　しっかり価値観植え付けられてるから。
小野田　そんなん。真澄ちゃんはなんも押し付けてへんやろ。
駿介　だから、押し付けやなくて、植え付けです。真澄さんの価値観が、幼い頃から椛さんの中でしっかり根を生やしてる。根っこの部分から、もう真澄さんの考え方、やり方に支配されてるってこと。
小野田　支配って、そんな大袈裟な。

駿介　だって、俺には想像できませんよ。生まれたときから山の中で。食べるもんも山で採れるものばっかりで。人間関係すら、ほとんど真澄さんとだけで完結する。ときどき旦那さん。あと小野田さん。

小野田　ついでみたいに言うな。

駿介　「三子の魂百まで」じゃないけど、物心がつく前から、こんな狭い世界で純粋培養みたいに育てられて。言ってみたらアレですよ。ジャングルの王、ターザンですよ。

みんな、否定も肯定もできない。

駿介　ちゃうか。微妙にちゃうか。忘れてください。

小野田　なんやねん。

椛　でも、小学校行くまではホンマにそうやったかも。幼稚園とかあるんも知らんかったし。

駿介　小さい頃からナイフ持って鹿とかイノシシの解体もやらされてたんですよね？

真澄　やらされてたって言い方。

駿介　その時点で普通ちゃうし、誰かが止めてもおかしくないと思うんですけど。

真澄　命をいただくことの大切さを教えるのは大事なことやんか。

駿介　それは大事かもしれませんけど、そんなやり方しなくても命の大切さは学んでこれましたし。

小野田　スンスケいい加減にせえよ？　それぞれの考え方があるやろが。

駿介　そうなんです。だから、その〝考え方の話〟です。考え方が植え付けられてる。それを大人になったからって、自分の力で修正したり、適応したりって、なかなか難しいんちゃうかなって。

みんなが駿介の話した内容を理解しようとする時間。

椛が自分に確認するように言う。

椛　難しいんやんな、やっぱり。こんな環境にどっぷり浸かって暮らしてきたんやもん。

小野田　そんなことないって。

駿介　小野田さん。外からはジャッジできませんから。

小野田　ホンマ…（いらんことばっかり言うて）。

真澄　その難しいことをやっていくんやんか。

真澄に視線が集まる。

真澄　私はこの生き方を選んで、なんの後悔もしてへん。それだけはまず言うとくわ。

小野田　真澄ちゃん。

真澄　ほんで、その暮らしに家族を巻き込んだことは、謝ることちゃうと思ってる。反省もできへん。

椛　別に私も謝ったりしてほしいわけちゃう。

真澄　ただ、あんたがそこまで苦しんでることに気づかんかったんは…

と、言いかけて、

真澄　ちゃうな。気づかんふりしてたことは、謝らんとあかんと

思ってる。
椛　気づかんふり？
真澄　うーん。それもホンマはちゃう。なんやろ…信じてた。うん、信じてたんやと思う。
椛　……。
真澄　私にはこの自然の中で暮らす生活こそが最良で、あんたにとってもそうやって信じてた。
駿介　やっぱり宗教の話、近いじゃないですか。
小野田　やかましい。
真澄　私はこの生活を選ぶ以外になかったんやけど、そのせいで、今、山の下で暮らすあんたにしんどい思いさせてることは…

真澄はたびたび自分の頭に浮かんだ言葉を逡巡する。
駿介が我慢できず、

駿介　そこは素直に「ごめん」でいいんですよ。
真澄　ちゃうねん。やっぱり「ごめん」ちゃうねん。椛が抱えてる辛さに気づいてやろうとせんかったことは悪かったって思ってんねんけど。それは、今日、あんたの必死な姿見て気づいたことで。

椛、黙って聞くしかない。

真澄　私の若いときと一緒やねん。コミュニケーションとか、一般常識とかで苦しんでるんやろ？　私も同じことで苦しんで、ここに逃げてきた。椛も私と同じやん。そんな思いしてまで町で暮らさんとあかんの？
椛　同じちゃうよ。なんでわからへんの？　私はここで育ったから余計やねんて。普通の人が困らんことで困ってる。
真澄　せやから、ここに戻ってきたらええやんか。
椛　私は普通に暮らしたいの。
真澄　この山にあるもんこそが、あんたの「普通」やねんで？
椛　それはお母さんが選んで、私に植え付けた「普通」やんか。
真澄　そしたらあんたはどうすんの。
椛　どうすんのって。
真澄　何を選ぶんよ。
椛　だから、私は、町で、普通の暮らしがしたい。普通に働いて、普通に友達つくって、普通に生きていきたい。
真澄　そうしたいって思うんやったら、どうすんのな。
椛　がんばるよ。がんばるしかないやんか。
真澄　難しいことなんちゃうの？
椛　そうやけど。しゃーないやんか。がんばらなしゃーないやんか。

真澄、椛の決意を受け止めるように手を取る。

真澄　椛は今、自分の困難と出会ってん。自分で選んで、それでぶつかってんねん。大人になろうとしてる瞬間やねん。
椛　わからん。
真澄　そらわからんよ。だって、経験してきたうちらと、まだ経験してへんあんたやもん。
小野田　スンスケもそっち側やからな。
駿介　なんで。
真澄　がんばらなあかんときがきてん。
椛　……
駿介　でも、なんか一人でがんばる感じは、俺はちゃうような気

がしますけど。
小野田　水差すなや。
修　一人ちゃうよ。俺らもおるんやし。
駿介　いや、そういう意味じゃなくて。もっと、世の中が誰でも生きやすくなる体制作らんとあかんっていうか。
小野田　それは英治とか政治家ががんばることや。いずれスンスケがやらなあかんことやろ。
駿介　なんで俺なんすか。
真澄　やけど、椛。あかん思ったらいつでも帰ってきてええんやで。ここはあんたの家やねんから。

椛、小さく頷く。

真澄　よし。朝ごはんにしよ。

と、場が収まる感じになり、一区切りつく。
椛が意を決したように言う。

椛　なあ。

皆、椛に視線。

真澄　なに。
椛　いっこ(ひとつ、の意)、お願いがあんねんけど。

と言ってから、なかなか口にしない。

修　なんや。
真澄　椛？

椛、時間を使ってから、

椛　私、誕生日やってん。11月3日。
真澄　それは知ってるよ、もちろん。LINEくらいしか出来てへんかったけど。
小野田　おぅ。おめでとうやんか。
椛　祝ってほしい。
真澄　え？
椛　お祝いしてほしい。
沙良　何それ。めっちゃかわいいやん。
真澄　するよそんなん。いくらでも。ええやんか、お祝い。しようや。
小野田　普通のな。普通のお祝いや。
駿介　ケーキとか？
小野田　そうや。
沙良　ハンバーガーは？　ハンバーガーええんちゃう。配達してもらお。
小野田　こんなとこまで誰も届けてくれへんわ。
沙良　そしたらピザとか。
小野田　一緒や。
駿介　って、よく考えたらまだお店開いてないですよね。
沙良　じゃあコンビニでお菓子とかスイーツとか。今日は徹底的にジャンクなやつにまみれよ、椛ちゃん。
修　そういう練習をしたいんか？
小野田　よっしゃ。ほんなら車2台あるし、手分けして、買い出し行こうや。

駿介　あ、じゃあ俺、その足で家まで送ってもらっていいですか？
小野田　なんでやねん。なんで帰ろうとすんねん。
駿介　そこは家族水入らずでやってくださいよ。
小野田　アホ。パーティーはたくさんでやった方がええに決まってるやろ。
真澄　椛。なんか食べたいもんないん？
椛　…ある。
真澄　うん。
小野田　言うてみ。
椛　もみじ。
真澄　え？
椛　あと、ぼたん。
真澄　なによ。
小野田　どういうこっちゃ。
椛　なんでわからへんの？
真澄　え。
椛　私がこんな痩せたん、なんでかわからんかった？

一同「？」

椛　ごはんが美味しくないねん。ファミレスのまかないなんか、ゲェ出るかって思うし、コンビニのお弁当、薬みたいな変な味しかせえへん。
真澄　椛。
椛　がんばって食べようとしても、全然あかん。何食べてもあかん。スーパーで売ってる豚肉もカスカスやし、外食しても調味料の味ばっかりで何食べてるかわからんなってきて。
修　それであんまり食べへんかったんか。
真澄　せやからパパ。言うたやんか。
修　そんなん言われても。歳頃やし、そういうもんかと思うやん。
真澄　（椛に）なんで私に言わへんのよ。いつでもうち食べに来たらよかったやんか。
小野田　言うてくれたらいくらでも新鮮なジビエ届けたったのに。
椛　だって、そんなん言われへんやんか。
沙良　そらそうやわ。普通を求めてんのに、また原点に戻っていくみたいになるもん。
駿介　これ、結構ヤバくないですか？　価値観の植え付けで胃袋つかまれてるってことですよね？
小野田　は？
駿介　だって、こんなん一生関わってくるやん。
椛　私、今日お母さんがご飯作ってくれてるって思ってた。ここに来たら、もみじとぼたんで迎えてくれるって思ってた。
真澄　え？
椛　そしたらもう焼肉してるし。
真澄　ごめん！
修　おいー
真澄　そんなん無理やん。まさかやんか。逆のこと思ってたわ。

椛、へたり込むように座る。

修　椛？
椛　早よ食べたい。
小野田　よっしゃよっしゃ。早よしよ。（真澄に）どうする？
真澄　鹿肉は昨日のがあるけど。
椛　イノシシ食べたい。猪肉（ししにく）。

真澄　わかった。ちょっと急いで罠見てくるわ。
小野田　一緒に行くわ。スンスケも来い。
駿介　えなんで。
小野田　お前そのために来たんやろが。
駿介　俺はもういいですって。
小野田　あかん。お前らみたいな若いのんに知っといてもらわんと
あかんねや。
駿介　何を。
小野田　命との向き合い方や。
駿介　なんですかそれ。
真澄　早速行ってくるわ。
小野田　よっしゃ行こ。
真澄　ちょう待っとってな。
駿介　掛かってなかったらどうするんですか。
小野田　大丈夫や。
駿介　根拠がない。
小野田　真澄ちゃんはくくり罠の名人やぞ。
駿介　そんな、素手で無理でしょ。
小野田　必要な道具は一式裏に置いてる。

家の裏手、獣道に入るまでにそういう置き場がある。

駿介　そんな都合よく掛かってないでしょ。
真澄　モモンバのくくり罠、なめたらあかんで。
駿介　なんですかそれ。

と言いながら、3人は獣道を上がっていった。
沙良が時計を見る。

沙良　まだ7時半。
修　一気に疲れたな。

沙良、景色を見て、

沙良　すごい景色。
修　うん。
沙良　うちの田舎って、どんな景色やったかな。

修、そこに的確に返す相槌は持ち合わせておらず、とりあえず
横並びになって、一緒に景色を見る。
沙良がふと振り返ると、椛が眠っている。

沙良　寝てる。
修　まあ、徹夜みたいなもんやったから。
沙良　風邪引かへん？
修　うん。

修、自分の上着をかけてやる。
山の方でイノシシが激しく鳴く声がかすかに聞こえる。
その声の方に視線。

沙良　イノシシ？
修　ええ？
沙良　ホンマに捕まえてくるんかな。
修　いやぁ。どうやろ。

しばし見ている。

沙良　修さん。こんな風にいつも置いてけぼりになってたんですね。

修　そうやねん。

と、力無く笑う。

沙良　豚って、野生のイノシシを家畜化したって知ってます？

修　何？　いきなり。

沙良　世界で最初に豚を家畜にしたんは中国人なんです。

修　へえ。

沙良　「家」って漢字。

修　家。

沙良　ウ冠の下の字。あれは「豚」って意味なんですよ。

修　物知りやな。

沙良　イノシシ捕まえて、それを家族で食べる。なんか、いいですね。

修　せやな。

沙良、また景色を見て、

沙良　帰ろっかな。

修　なんで。椛、お祝いしたってえや。

沙良　実家にですよ。

修　え。

沙良　帰ろっかな。

そこに、慌ただしくイノシシを背負って降りてくる真澄。

沙良　ウソやん。

修　早すぎる。

小野田　真澄ちゃん。持ったるって。

真澄　あかん。私の獲物や。

駿介　凄かった！　めちゃくちゃ凄かった！　止め刺しまでの一連の流れ！

小野田　せやろが。

駿介　ホンマに掛かってるって思わんかった。

小野田　なめんな言うたやろ。

真澄　椛！

椛、顔を上げる。

真澄　手伝って。解体するで。

椛　え？　え？　もう？　早っ。

真澄　自分で食べる分は、自分でやる。それがうちの教えや。

と、言いながら、解体小屋へ運んでいく。

小野田が手伝って持ち上げて、フックに掛ける作業。

小野田　スンスケ、お前ラッキーやぞ。鹿の翌日にイノシシの解体まで見れて。

駿介　もう昨日で十分ですよ。

小野田　なんも十分なことあるか。

駿介　俺じゃなくて椛さんでしょ。

小野田　ええから、ホース、蛇口繋いで持ってこいって。

駿介　ええ。
小野田　さっさと動く。
駿介　もう。

と、駿介はホースを水場の蛇口に繋ぐ。

真澄　2歳のメスやな。まだ子ども産んでへんわ。
小野田　おお、「産まずイノシシ」か。最高級やんか。
真澄　椛、早よおいで。
小野田　スンスケも早よせいって。
駿介　してますって。

小野田と真澄がイノシシを吊り下げる作業。
それを見守る面々。

椛　私、がんばれるかな。
修　え？
椛　何をがんばったらええんかな。
沙良　さっき修さんが言うてたことは？
椛　？
沙良　ホンマに店やったらええんちゃう？
椛　え？

解体小屋から声。

小野田　スンスケ、ホース！
駿介　はい。（と言って、ホースだけ渡すので）
小野田　お前もこっちや。

駿介　ええー

と、小野田が駿介を解体小屋に引き込む。

沙良　ジビエ料理の店。自分が町で暮らしながら食べられるもん、自分で作れるようになったらええやん。
修　うん。ええやん。ええと思うよ。
沙良　修さんの退職金もあるんやし、調理の専門学校とか行かしてもらったらええやん。
椛　え。
沙良　ええやんね？　修さん。
修　……
沙良　そこは即答でしょ！
修　わかってる。そういう意味ちゃう。ちょっとグッと来たんや。俺がしてやれること、ちゃんとあるんやって思って。
椛　お父さん。
修　お前がその気になったら、いつでも。

真澄が椛を呼ぶ。

真澄　椛！　早よぉ！
椛　わかったって。

椛、修に向き直って、

椛　ありがとう、お父さん。
修　おう。

解体小屋から声。

真澄　そしたら足から皮剥いでいくでぇ。
駿介　わあぁぁぁぁぁ。
真澄　うるさいなぁ！

解体小屋から笑い声。

椛　よし。

と、解体小屋へ入っていく。

了

※収録戯曲の上演を希望される場合は http://www.iaku.jp の問い合わせフォームより、ご連絡ください。

初版　令和五年十一月二四日
二刷　令和五年十二月八日

「モモンバのくくり罠」

発行元　一般社団法人 iaku
著者　横山拓也
問い合わせ　info.iaku@gmail.com
ホームページ　http://www.iaku.jp